

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. XV, 2024

仙石山仏教学論集 第15号（令和6年）

七寺一切經本『妙法蓮華經優婆提舍』解題・翻刻

浅
野

学

七寺一切経本『妙法蓮華経優婆提舍』解題・翻刻

浅野 学

要旨

本稿は、近年筆者が取り組んでいる日本古写経本を用いた『妙法蓮華経憂婆提舍』（以下、『法華論』）の文献学的研究の一環として発表するもので、主に新出資料である七寺一切経本『法華論』に関する解題と、その全文翻刻である。

二〇二一年十二月、筆者は日本古写経研究所が実施した七寺一切経の実地調査（於名古屋市中区大須）に参加する機会を得て、稲園山七寺に所蔵されている『法華論』一巻本と二巻本の計二点の古写本を見つけた。

一点は菩提留支訳『妙法蓮華経優婆提舍』一巻本であり、保存状態の良い古写本である。もう一点は菩提留支訳『妙法蓮華経憂婆提舍』二巻本で、冒頭箇所が少し破損しているが、全体的には大部分の本文が確認できる古写本である。

本稿の解題篇では、七寺蔵の二種の『法華論』古写本に関する基本的な事柄を確認し、それから一巻本が「古形の菩提留支訳」の系統であること、二巻本は聖語蔵本・金剛寺一切経本・房山雲居寺石経本などと同じ系統のテキストであることを確認した。

また、『法華論』諸本を対校した結果、七寺本（一巻本）の本文系統は、円弘『妙法蓮華経論子注』所引の『法華論』と近似しており、これらのテキストが叡山版に比して祖型を留めていることが分かった。

また、中国法相宗第二祖の慧沼が引用する『法華論』テキストと一致することから、敦煌写本の中にも残っていない七寺本（一巻本）系統のテキストが、唐代前期頃までに確かに流布していたことが新たに分かった。

翻刻篇では、七寺蔵の菩提留支訳『妙法蓮華経優婆提舍』一巻を底本として、全文を翻刻した。校本には叡山版『法華論』を使用し、異同のあった箇所は全て指摘した。

解題

はじめに

敦煌写本と比肩して語られる高い資料的価値を有する日本古写経本を用いた文献学的研究が、近年盛んに行われている。^①興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』（『法華論』『法華経論』『妙法蓮華経論』とも称される）をめぐっての拙稿「二〇二二」「二〇二二A」「二〇二二B」を足掛かりとして、筆者が現在継続して取り組んでいるのが、日本古写経本を用いた『法華論』の文献学的研究である。

『法華論』のテキストには、『大正新脩大藏経』（以下、『大正藏』）の底本である高麗再雕版を始めた各種刊本大藏経や、日本で江戸時代に刊行された版本、奈良朝古写経の転写本たる平安古写経など、^②多種のものが存する。しかし、これら『法華論』諸本におけるテキスト系統などの問題については、未解明な所も多く、思想研究の基盤となる文献学的研究上の研究課題となっている。

以前、本論集第十三号に投稿した拙稿「二〇二二B」では、新出資料であった二種の興聖寺本『法華論』の内容を報告し、その内、菩提流支訳で一卷本の院政期写本を底本とした全文翻刻を公表した。^④興聖寺本に認められる資料的意義から、その翻刻資料は、身延山大学教授の金炳坤氏が行われている『法華論』の文献学的研究でも用いられている。^⑤

本稿で取り扱う七寺一切経本『法華論』は、『^{史料}尾張七寺一切経目録』（以下、『七寺目録』）によってその所在が伝えられていたが、^⑥その内容は最近まで公開されていなかった、新出の『法華論』古写本である。七寺には興聖寺と同様に、勒那摩提訳は存せず、一卷本と二巻本の菩提留支訳『法華論』が現存する。七寺所蔵本は、一つは菩

提留支訳『妙法蓮華經優婆提舍』一卷であり、もう一つは菩提留支訳『妙法蓮華經憂婆提舍』二巻である。このうち、本稿では七寺所蔵の一卷本を底本とし、校本には寛永二年版（叡山版古活字本）^⑨を用いて全文翻刻を行った。本翻刻は、現在筆者が取り組んでいる日本古写経本を用いた『法華論』の文献学的研究の一環として実施するものである。^⑩

七寺本『法華論』の翻刻を公表する意義は、現行の各種刊本大蔵経とは異なる本文内容を有する本資料が、関連研究に新知見を齎し得ると考えるからであり、また知的財産保持の観点から閲覧には一定の制約が課されている本資料を、翻刻によって公表することで、関連研究を推進する一助となり得ると考えるからである。^⑪

本解題では、七寺本『法華論』に関する基本的な事柄について確認しつつ、『法華論』を巡る最近の研究動向や、七寺本『法華論』の翻刻作業及び『法華論』の諸本対校を通して分かったことなどを記した。

一 七寺一切経について

七寺（稲園山長福寺）は、愛知県名古屋市中区大須に所在する真言宗智山派の古刹である。開創は奈良時代の天平七年（七三五年）、行基（六六八―七四九年）によってなされ、正覚院と称して、かつては尾張国中島郡萱津里（現在の稲沢市七ツ寺町）に所在していた。^⑫その後、正覚院は自然災害や兵乱により荒廃したが、仁安二年（一一六七年）に、大中臣安長と豊後守親実とが資財を寄捨して、七堂伽藍と十二の僧坊を建立し、寺号を稲園山長福寺に改めた。近世、將軍徳川家康の清洲城から名古屋への移転に伴い、慶長十六年（一六一一年）に、七寺も現在地に移され、享保年間には藩主の祈願所となり寺基を拡張した。明治十二年（一八七九年）に智積院末となったが、昭和二十年（一九四五年）三月に起きた名古屋大空襲によって、広潤であった境内も悉く烏有に帰した。

不幸中の幸いであったのは、疎開によって難を逃れた七寺の旧国宝である唐櫃入一切経と、避難のため持ち出された（焼失の旧国宝阿弥陀如来の）両脇侍の聖観音・大勢至菩薩坐像が現在まで伝わっていることである。

七寺一切経は、七寺中興の大中臣安長が亡き娘の菩提を弔うために発願し、時の住持栄芸とその弟子栄俊を勧進僧として、承安五年（一一七五年）から治承二年（一一七八年）にかけて書写された一切経である。奥書の記録から、七寺一切経の書写・校合に関わった者は九十人余りいたという。

散逸が少ない七寺一切経は、現在も四九五四巻と、これらを納めた当初からの唐櫃三十合が現存している。¹³明治三十三年（一九〇〇年）には「辛櫃入一切経」という指定名称で旧国宝に指定され、戦後には再調査によって重要文化財に指定変更されている。¹⁴昭和三十九年（一九六四年）から四十一年（一九六六年）にかけては、文化庁の調査チームが、七寺一切経の悉皆調査を実施し、その成果は昭和四十三年（一九六八年）に『七寺目録』として報告されている。¹⁵

その後、平成二年（一九九〇年）には、落合俊典氏が七寺一切経中に数十点の古逸経典を発見されたことを契機として、牧田諦亮博士を会長とした七寺古逸経典研究会が結成され、¹⁶その頃から七寺一切経の調査・研究が盛んに行われるようになり、その成果は『七寺古逸経典研究叢書』全六巻として結実した。現在、日本古写経研究所から継続的に刊行されている『日本古写経善本叢刊』や『日本古写経研究所研究紀要』などにおいても、七寺本一切経と先の研究成果は、多大なる学術的恩恵を与えている。

七寺一切経の特徴について、落合俊典「一九九四」は「現在までに判明したところを分類すると大きく二つに分けられる。先ず第一は七寺一切経は他の平安寫経と異なつて古逸経典を数多く含むということ。その第二は七寺一切経はその大半が奈良朝寫経系統の轉寫本であるということである」¹⁸と述べている。七寺一切経の具体的な内容については、唐櫃内蓋に残された經典目録から、円照（生没年不詳）『貞元新定釈教目録』に依った一切経と

されていたが、落合俊典「一九九四」は「刊本貞元録（高麗藏本）と日本に残る古写本の『貞元録』との相違を示されたのは塚本善隆博士である。七寺一切経の編成も本来の古本『貞元録』に従ったのはまず相違ないと思われる」と指摘している。その底本は主として、当時、尾張地方周辺に伝わっていた奈良朝以来の書写一切経が用いられたとも言われているが、一部には巻末に開宝蔵の刊記を有しているものがあることも報告されている。

現在、落合俊典所長率いる日本古写経研究所によって、七寺一切経の調査・保護・撮影活動が継続的に行われており、撮影されたデジタル画像は順次、日本古写経データベースに追加されている。

二 『法華論』について、及び近年の研究動向

北インド出身の世親（四～五世紀頃。Yasubandhu）が撰した『法華論』は、大乘經典『法華経』の注釈書であり、インドで書かれた『法華経』注釈書としては、唯一現存するものである。梵本、藏訳は現存しないが、漢訳の二種が現存する。漢訳『法華論』は、古来、『法華経』の研究において重要視されて来た論書であり、『法華論』を解釈して、論を為した注釈家は数多い。とりわけ中国三論宗の吉蔵（五四九～六三三年）撰『法華論疏』三卷、²⁴『法華玄論』十卷、²⁵『法華義疏』十二卷、²⁶『法華遊意』二卷、²⁷中国天台宗の智顗（五三八～五九七年）説・灌頂（五六一～六三二年）記『妙法蓮華経玄義』十卷、²⁸『妙法蓮華経文句』十卷、²⁹中国法相宗の基（六三三～六八二年）撰『妙法蓮華経玄賛』十卷、³⁰日本天台宗の最澄（七六七～八二二年）撰『法華論科文』一卷、³¹円珍（八一四～八九一年）撰『法華論記』十卷³²など、『法華論』に依拠し、盛んに引用する注釈書はよく知られている。³³

現行本の『大正蔵』第二十六巻には、二種の『法華論』が収録されている。³⁴一つは、勒那摩提訳『妙法蓮華経論優波提舍』一巻で、もう一つは、菩提留支訳『妙法蓮華経憂波提舍』二巻であり、これらは同本異訳である。³⁵

『法華論』の国訳には四種類が知られ、このうち藤井教公氏・池邊宏昭氏らによる訳注には、現代語訳も収録されている。また、カリフォルニア大学から刊行されたTerry Rae Abbott [一九八五] (学位論文) における『法華論』の英訳・訳注が知られる。³⁷⁾

『法華論』を巡る此処十年ほどの研究動向としては、現行本とは異なる内容を有する『法華論』が存することについて、金炳坤 [二〇一七] と桑名法晃 [二〇一六] ³⁸⁾ によって報告され、二〇二〇年に刊行された『妙法蓮華経優婆塞捨の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ (以下、叢書Ⅱ) では、その研究成果が纏めて発表され、併せて寛永二年 (一六二五年) 古活字版と正保三年 (一六四六年) 版の『法華論』の影印が掲載された。叢書Ⅱでは、「経曰 婦命一切諸仏菩薩」 (以下、婦命頌) の文を有する江戸期刊行の版本『法華論』一卷本や、八世紀以前に活動した新羅僧の円弘『妙法蓮華経論子注』⁴⁰⁾ (以下、『子注』) 所引の『法華論』 (以下、子注法華論) などが、古形の菩提流支訳のテキストを伝える資料であることが明かされた。

また叢書Ⅱに少し先行する『身延論叢』第二十五号では、「円弘と妙法蓮華経論子注」特集が組まれている。この中で、金天鶴 [二〇二〇] は、子注法華論が現行本とは異なる構成 (婦敬頌 + 婦命頌 + 如是我聞) を持つ第三のテキストであり、本文が現行の菩提留支訳と勒那摩提訳の混ざったものであることが分かった、としている。叢書Ⅱ所収の金炳坤 [二〇二〇A] [二〇二〇B] では、金天鶴 [二〇二〇] の「第三のテキスト」説を踏まえて論じており、その「第三のテキスト」は具体的には「流支訳『法華論』の古形」であるとしている。⁴³⁾

しかしながら、『子注』は巻中と巻下の半分ほどが散逸しているため、金炳坤 [二〇二〇B] に課題として挙げられていた古形の菩提流支訳の復元は、新出資料の発見に懸かっている所もあった。⁴⁵⁾

叢書Ⅱが刊行された頃と同時期、筆者は令和二年 (二〇二〇年) 度の日本印度学仏教学会第七十一回学術大会に参加し、新出の興聖寺本『法華論』テキストについて斯界で初めて報告した。その際には、院政期写本の巻首

に傍注のような形で帰命頌が付記されていること、二種の興聖寺本が現存の諸本とは異なる内容を有していること、興聖寺一切経全体の傾向から院政期写本は奈良朝写経の転写本である可能性が高いことを指摘した⁴⁶。その後、拙稿「二〇二二A」では、金炳坤「二〇二〇B」の分類法に従って、興聖寺の院政期写本が古形の菩提流支訳と同じ系統に属することを報告し、また、新出の七寺一切経本『法華論』一卷が、同じく古形の菩提流支訳の系統に属する本文内容を有することを初めて報告した。また、本論文集の第十三号には、本稿の「はじめに」でも触れた興聖寺本の全文翻刻を投稿した。さらに拙稿「二〇二二」では、黒板勝美編『真福寺善本目録』続輯⁴⁸によって新たに見出し、実物調査の機会を賜り実見した真福寺本『法華論』について初めて報告し、それを基に、令和五年（二〇二三）十一月開催の日本古写経研究所第二回公開研究会において、真福寺本『法華論』の資料的意義について研究発表を行った⁴⁹。

本稿の執筆は、自身の先の研究に続いて実施したもので、七寺本『法華論』の全文翻刻を主とするものであり、今後の研究に繋げていくための布石でもある。

三 七寺本『法華論』の特徴と本文系統

七寺所蔵の二種の『法華論』古写本には、書写奥書が存しないが、校合奥書があり、勧進僧榮芸と大法師榮俊の名が見える。写本の形式は、七寺一切経成立当初の天地朱界・縦墨界であり、安元二年（一一七六年）から治承三年（一一七九年）の間に書写されたと見られる平安末期書写本である⁵⁰。

奥書について述べると、一卷本の巻末には「一交了 永藝」とあり、二巻本の巻上の巻末には「一校了榮俊^マ」とあり、巻下の巻末には「一校了 榮俊」とある。

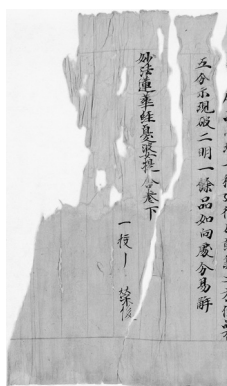
これら計三卷の『法華論』の卷末に記される校了奥書に名が見える、永芸（栄芸）^①と栄俊は、『大般若經』を納める唐櫃以外の外蓋裏にある朱漆書の起請文にもその名が見える。起請文には、

勸請 鎮守十五所權現大明神御宝前

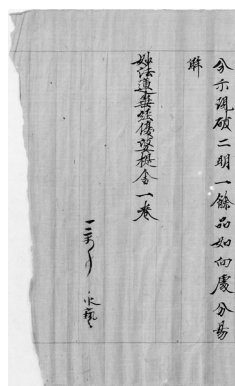
謹請 一切經安置間五箇条起請狀

- 一、後々将来、寺家不集来者、独竊不可開唐櫃事
- 一、後々将来、雖強縁眠人、不可奉借出他箇他境事
- 一、後々将来、於國中、雖為書写奉請、一度一合外、不可奉借出多合事

- 一、後々将来、寺中居住僧、炎天比一年一度、可奉于施事
- 一、後々将来、寺中僧、依他人語竊不可借出事
- 右事為縁、雖似邪見、夫以世間作法或為火難、或鼠敵或為盜失、其恐尤以切也、若箇中郡内、為書写奉読有奉請之望人者、奉請一合令返送、其一合之後、又可奉請一合、連々如此用之、一度巨多奉請之事、永以停止、何況於他國奉請哉、若背此状之人者、可奉任大行事熱田大明神、八剎大明神也、神威嚴重者、人誰違之御願經中所載三世十方諸護法聖衆、伏乞諸天善神住劫垂跡諸冥衆龍神鬼神、同心命知見証明給、謹起請如件



卷下卷末



一卷本卷末

治承二年^{戊戌}八月 願主惣大判官代散位大中臣安長女弟子民氏

勸進僧 榮藝
大法師 榮俊

とある。^{⑤2} 赤尾榮慶「二〇〇〇」は、「經文の校合を行つた僧は、榮俊（永俊）ら五十人余を数えているが、その半数が書写者とダブっている。ただし、『唐櫃の起請文』に名を連ねた榮芸（永芸）は、書写と校合いずれも行っているが、榮俊（永俊）の方は、書写を行わず、校合のみを行っている」と述べており、そうすると、一卷本を校合した榮芸は『法華論』の書写も行っていた可能性があるが、一方、二卷本を校合した榮俊は、『法華論』の書写には関わっていないことになる。榮芸は当時の七寺の住持であり、榮俊はその弟子であった。^{⑤4}

拙稿「二〇二二A」で言及したように、巻首に歸敬頌と歸命頌を有し、「自此已下示現所說法因果相応知」の一文が方便品に置かれている七寺所蔵の一卷本の菩提留支訳は、金炳坤「二〇二〇B」の分類法に従えば、古形の菩提留支に該当する。また、七寺所蔵の上下二卷本の内、巻上については、拙稿「二〇二二B」で、「もう一点は欠損により内題が存しないが、歸敬頌が確認できるもので、尾題には『妙法蓮華經憂婆提舍卷上』とあり、上下二卷本の巻上と見られる。（中略）二卷本の巻上と見られるものは、金剛寺本等と同系統であることがわかった」と述べた通りであり、これら七寺本『法華論』にも曇林の前序は見られない。但だ一つ言い忘れていたことがあり、それは『八種目錄』にも示されているように、^{⑤6} 七寺所蔵の上下二卷本には巻下もあり、筆者は巻上を初めて実見した際に、巻下も実見していたことである。拙稿「二〇二二B」の執筆時には、『法華論』の金剛寺本と聖語蔵本（No. 185）とが、巻上のみ現存しているということに気を取られていて、七寺所蔵の二卷本の巻下の存在が抜け落ちてしまっていた。そのため、今回初めての言及となるが、七寺所蔵の二卷本の巻下は、巻上と同様に

欠損により内題が存しないものの、尾題には「妙法蓮華經優婆提舍卷下」とあるもので、その形式などから、先の巻上と一具をなすものと見て特に問題はなさそうである。巻下には、巻上では完全に欠けていた巻首の著者・



七寺本『妙法蓮華經優婆提舍』巻下の巻首

訳者の箇所が一部確認できる。当該箇所は巻下の巻首にあるため、その画像は日本古写経データベースでどこからでも閲覧できるが、今の画像を此処に示す。なお、行番号を付し、左側には翻刻を載せ、欠損がないか少ない行では、参考までに一行あたりの字詰めを丸括弧の中に示した。翻刻の表記は、本稿三〇頁の凡例に準ずるが、欠損部分で文字数が不明である場合は、角括弧で括った二マス空白（ ）で示す。

巻下の巻首には「留支」の名が見え、先の巻上には序品の末に「自此以下示現所説法因果相応知」の一文が確認でき、方便品にはこれがないため、七寺所蔵の『法華論』二巻本は、現行本の菩提留支訳二巻本に近いものであるが、高麗再雕本に見られる「又依義攝三故…等故」の五十二字を有していないため、所謂「菩提留支訳『法華論』の別本」^⑧ではなく、聖語藏本

- 1 「」 乘論師婆數槃豆釋
- 2 「」 留支共沙門 曇林寺譯
- 3 如是已說妙法功德具足次說如來法師功（二行十七字）
- 4 德成就應知如經何以故舍利弗諸佛如來（二行十七）
- 5 自在□□成□故如來成就四種功德故能度（二行十八字）
- 6 「」 為四一者住成就如經舍利弗如
- 7 「」 方便故□種方便者謂從兜
- 8 變天中退沒乃至示現入涅槃故二者教化（二行十七字）
- 9 成就如經種種知見故種種知見者示現深淨諸（二行十九字）
- 10 回故三者功德畢竟成就如經種種念觀故種種（二行十九字）
- 11 念觀者以說彼法成就因緣如法相應故四者說（二行十九字）
- 12 成就如經種種言辭故種種言辭者以四無礙智（二行十九字）
- 13 故何等何等名字章句隨何等何等衆生能（二行十七字）
- 14 受而為說故又復有義種種方便者種種方便示（二行十九字）
- 15 現外道所有耶法如是如是種種過失故種（二行十七字）

（No.1817）・金剛寺一切經本・興聖寺刊本・江南系統大藏經本の菩提留支訳、及び房山雲居寺石經本の菩提流支訳と同系統のテキストとなる。なお同箇所によると、一行当たりの字詰めは十八字前後で推移しており、あまり一定していない。

一切経の中に一卷本と二巻本の菩提留訳を含み、且つ勒那摩提訳は存在しないという、七寺一切経における『法華論』の収録状況は、興聖寺一切経における『法華論』の収録状況と一致しており、このことは、日本の平安時代末期頃に書写された写本一切経の一特徴を示すものであるかもしれない。

四 一巻本の誤脱・衍字などについて

七寺所蔵の一巻本『法華論』におけるテキスト上の問題点としては、巻全体を通して見られる脱字の多さがある。まずは翻刻篇の注記で指摘した脱字箇所を以下に示す。なお、数が多いため一百行毎に区切って示し、七寺本において当該の脱字が存する行数とその脱字内容を示した。本稿翻刻篇と合わせて参照されたい。

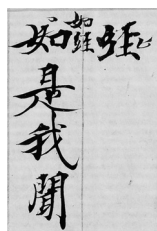
100行目まで…21為	27諸	48謂・漢	63昧
200行目まで…116彼	134上	142諸	158器
300行目まで…223説	226縁	259者	164不
400行目まで…304彼	326畏	332説	334法
500行目まで…440是	442取	445行	446作
600行目まで…536證・如	543故	564遮	583謂
700行目まで…623無	661倒	667涅槃	669復
800行目まで…715説	773経	774發（または「起」）	786者
801行目以降…806王	810受持		791二
			792法

右に示した所を纏めると、七寺本『法華論』には、計五十箇所（48行目・187行目・536行目は行内に二箇所の脱字）、計五十六字（195行目・667行目・810行目は二字の脱字、185行目は四字の脱字）の脱字が確認された。このうち網かけで示した八箇所（48行目・142行目・304行目・368行目・583行目・623行目・791行目・806行目）は、当該字が行末の改行する位置に置かれるはずであることを示したものである。行末における脱字が、計五十の脱字箇所のうちの八箇所ということになると、およそ七回に一回は行末の改行時に脱字の問題が起こっていることとなる。これは一行の字詰めが十六字前後である本写本からすると、有意差があると言え、脱字の問題が特に改行時に起きやすかったことを示している。

また、先に指摘した五十箇所以外で、脱字しているがその箇所に補入記号が付されて、補入記号の右傍に挿入すべき字が示されている（773行目については上方欄外に挿入すべき字が示されている）箇所が確認できる。以下に、それらが確認できる箇所と、補入記号が示す字を記す。

補入記号… 28故 32如経 148如経 156名 189如経 244現 308起已 407分

432如来 622具足 773槃歟（上方欄外） 774心 777者 779若 784以 818謂



31～32 行目

補入記号が確認できる箇所は、右に示した計十六箇所である。その内、244行目の箇所は、諸本との対校からも「現」を挿入する必要がない。また、773行目の箇所は、脱字箇所に補入記号が付されており、上方欄外には「槃歟」とある。

また、見せ消し・倒置符・擦り消し、が確認できる箇所も全て指摘しておく、以下の通りである。

見せ消ち…	30 ^ヒ 31 ^ヒ 293 ^ヒ 387 ^ヒ
倒置符…	494 ^ヒ 誇（上方欄外に「證 ^衆 」） 553 ^ヒ 酪（上方欄外に「酪 ^衆 」） 806 ^ヒ 妙
擦り消し…	283 ^ヒ 〇妙勝 562 ^ヒ 〇解得 147 ^ヒ 如経 188 ^ヒ 如経



188～189 行目

見せ消ちは、削除・訂正すべき字の右傍に「ヒ」が付されており、806行目の場合では打ち消し線が引かれている。倒置符は、互いに置き換えるべき二字の、一字目の上方と二字目の右傍に付されている。擦り消しは「如経」に対して見られ、補入記号の所で挙げた148行目189行目の手前に見られる。

また、本写本に見られる脱文・衍文の箇所も、テキスト上の問題点として存する。以下に、その当該箇所を、翻刻篇で校本とした叡山版と、及び大正蔵本の両訳も加えて示す。

阿耨多羅三藐

故 【七寺本】

阿耨多羅三藐三菩提不退轉等者有十三句示現菩薩功德成就故

【叡山版】

阿耨多羅三藐三菩提

等者

十三句示現菩薩功德成就故

【勒那摩提訳】

阿耨多羅三藐三菩提不退轉等 有十三句示現菩薩功德成就

【菩提留支訳】

現 希有回成就者以无量時

不可稱不可量者

【七寺本】

現見希有因成就者以無量時不可得故不可思議不可稱不可量者

【叡山版】

現見希有因成就者 無量時不可得故不可思議不可稱不可量者 【勒那摩提記】
現見希有因成就者以無量時不可得故不可思議不可稱不可量者 【菩提留支訳】

三者不知

者不知究竟唯一佛乘故 【七寺本】

三者不知義以一切聲聞辟支佛等不能知彼真實處故此言不知真實處者不知究竟唯一佛乘故 【叡山版】

三者不知義以一切聲聞辟支佛 不知彼真實處故 不知真實處者不知究竟唯一佛乘故 【勒那摩提記】

三者不知義謂諸 聲聞辟支佛等不能知彼真實處故此言不知真實處者不知究竟唯一佛乘故 【菩提留支訳】

先ずは脱文箇所についてであるが、右に示したように、七寺本には計三箇所の脱文箇所が存する。一箇所目は、翻刻テキストの45行目に「三鬟故」とある箇所で、他の『法華論』テキストと比較すると、十六字～二十字ほど脱文していることが推察される。二箇所目は、翻刻テキストの276行目に「時不可」とある箇所で、他のテキストには等しく「不可得故不可思議」の八字が存する。当該箇所は「不可」が頻出する場所であるため、書写上の問題が発生しやすいことが考えられ、七寺本の書写者か或いはその祖本の系統の、何れかの時点でこのような脱落が生じたのであろう。三箇所目は、翻刻テキストの539行目に「不知者」とある箇所で、他のテキストに比べると二十一字～二十五字ほどの脱文のあることが伺える。勒那摩提訳で見ると、引用した箇所には「不知」が四度、使われている。恐らく、先の「不可」の事例と同じように、頻出する「不可」が一因となって、七寺本系統の何れかの時点でこのような脱文が発生したのであろう。

続いて、七寺本に見られる衍文箇所を示す。

247 文殊師利自見己身是過去妙光菩薩
 248 於彼佛所聞此法門為衆生說故成就
 249 十種事者何等為十一者現見大此法
 250 門為衆生說故成就十種事者何等十
 251 一者現見大義曰成就二者現見世間

一巻本の衍文箇所①

247 文殊師利自見己身是過去妙光菩薩
 248 於彼佛所聞此法門為衆生說故成就
 249 十種事者何等為十一者現見大此法
 250 門為衆生說故成就十種事者何等十
 251 一者現見大義曰成就二者現見世間（第十一紙）

右の画像の箇所は、第十紙から第十一紙にかけての所で、250行目と251行目の間は、紙継ぎの部分である。当該箇所には一度細字で書かれ、その後で擦り消されたような「此法門為衆生說故成就十種事者」の十四字が薄らと見える。これは、248行目から249行目、及び249行目と250行目にある本文内容と一致している。どのような意図で一度、行間にこのような文が書かれたのかは、はっきりとしないが、恐らく同箇所に見られるテキストの混乱について、指摘するために書かれたのであろう。同箇所は、叡山版などとの比較からも、249行目から251行目にかけての「此法門為衆生說故成就十種事者何等十一者現見大」が直前の文章と重複した衍文であることが分かる。なお翻刻篇では、読みやすさを考慮して、同衍文箇所にも二重取り消し線を引いている。一巻本における、もう一つの衍文箇所は、

387 化成就如經種種知見故種種知見者
 388 示現染淨諸目故種種知見者示現染淨
 389 諸目故三者功德畢竟成就如經種種

衍文箇所②

387 化成就如經種種知見故種種知見者
 388 示現染淨諸目故種種知見者示現染淨
 389 諸目故三者功德畢竟成就如經種種

となつてゐる。この部分でも先の衍文と同じような誤りが起きていて、「種種知見者示現染淨諸目故」の文が重複している。また先にも挙げたように、387行目「種種種」の箇所には、一字目の「種」右傍に見せ消し記号の「匕」が付されており、意味上からも諸本との対校からも一字削除すべきであるから、この校正指示は正確であ

る。見てきたように、誤脱・衍字などのやや存する七寺本ではあるが、巻末に「一交丁 永藝」と記されている住持栄芸が施したであろう校正の跡も看取できる。

五 諸本対校から見たる七寺本の位置

本章では、金炳坤氏の『法華論』諸本校合⁶⁰に倣い、本稿翻刻篇で全文翻刻を行った七寺蔵『法華論』一卷本を中心として、対校する意義が認められる諸本を私に選定し、対校を実施する。今回は、『法華論』の本文中から、テキスト間の異同等に特徴のある四箇所を選んだ。以下にそのテキスト一覧を提示し、その後に検討の結果を述べていく。なお子注法華論を始めとして、序品部分の諸テキストについては金炳坤「二〇二〇C」（以下、校合②）などの成果が公表されているので、ここでは校合②を参照しつつ、校合②に掲載されていないテキストについては、各種一次資料に当たった。また諸本対校における異同の表記や異体字の取り扱いなどについても基本的に校合②に準じた。

校合②一六六頁～一六七頁

【七寺本】	上上起門者	諸漏已盡故名爲阿羅漢	以心得自在故名	諸漏已盡	以	無復煩惱故名	心得自在	日本古写経テクベース 貞元〇六八二
【子注法華論】	上上起門者	謂諸漏已盡故名爲阿羅漢	以心得自在故名	謂諸漏已盡	以	無復煩惱故名	心得自在	校合②の(1)
【穀山版】	上上起門者	謂諸漏已盡故名爲阿羅漢	以心得自在故名	謂諸漏已盡	以	無復煩惱故名	心得自在	叢書Ⅱ、影印二巻一三表
【敦煌摩提訖】	上上起門者	謂諸漏已盡故名爲阿羅漢	以心得自在故名	謂諸漏已盡	以	無復煩惱故名	心得自在	校合②の(7)
【興聖寺写本】	上上起門者	謂諸漏已盡故名爲阿羅漢	以心得自在故名	謂諸漏已盡	以	無復煩惱故名	心得自在	拙稿「〇二二B」三六頁一三七頁
【興聖寺刊本】	上上起門者	謂諸漏已盡故名爲阿羅漢	以心得自在故名	謂諸漏已盡	以	無復煩惱故名	心得自在	同上

七寺一切経本『妙法蓮華経優婆提舍』解題・翻刻（浅野）

七寺一切経本『妙法蓮華経優婆提舍』解題・翻刻（浅野）

【科註法華論】	上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名	諸漏已盡	以	無復煩惱故名	心得自在	校合②の④
【大正摩提訖】	上上起門者謂諸漏已盡故名爲	羅漢以心得自在故名	諸漏已盡	煩惱故名	心得自在	校合②の⑧
【摩提訖⑧⑨】	上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名爲諸漏已盡	羅漢以心得自在故名爲諸漏已盡	以	無復煩惱故名爲心得自在	同上	同上
【摩提訖⑩⑪】	上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名爲諸漏已盡	羅漢以心得自在故名爲諸漏已盡	以	無復煩惱故名爲心得自在	校合②の⑩	同上
【大正留支訖】	上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名爲諸漏已盡	羅漢以心得自在故名爲諸漏已盡	以	無復煩惱故名爲心得自在	校合②の⑪	同上

当該箇所を見ると、七寺本は常不輕院日真（一四四四～一五二八年）編著『科註妙法蓮華経論』所引の『法華論』（以下、本稿では、科註法華論と表記する）と一致する。七寺本は諸本にある「上上起門者」の下の「謂」と、「阿羅漢」の「漢」が脱字と判断される。七寺本は子注法華論とほぼ一致するが、子注法華論には「名謂諸漏已盡」とあり、七寺本にない「謂」がある。叡山版は、七寺本・子注法華論にない「諸漏已盡故名爲羅漢・心」があり、特に「諸漏已盡故名爲羅漢」の文は、『大正蔵』の勒那摩提訖の校本のうち、宋本・元本とのみ一致する。「諸漏已盡故名爲羅漢・心」の有無から、七寺本・子注法華論は叡山版と一致しない。七寺本・子注法華論と叡山版を同系統と見做す場合、七寺本・子注法華論は古い形を留めており、叡山版は留めていない。

校合②一七〇頁～一七一頁

【七寺本】	衆所知識者諸王王子大臣人民首釋	梵天王等皆識知故	復言聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆	善知故名	衆所知識	日本古経データベース 貞元〇六八二
【子注法華論】	衆所知識者諸王王子大臣人民首釋	梵天王等皆識知故	復言聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆	善智故名	衆所知識	校合②の①
【叡山版】	衆所知識者諸王王子大臣人民首釋	梵天王等皆識知故	復言聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆	善知故名	衆所知識	義書Ⅱ、影印三巻
【敦煌摩提訖】	衆所知識者諸王王子大臣人民首釋	梵天王等皆識知故	復言聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆	善知故名	衆所知識	校合②の⑦
【興聖寺写本】	衆所知識者諸王王子大臣人民首釋	梵天王等皆識知故	復言聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆	善知故名	衆所知識	拙稿「〇二二B」三七頁
【興聖寺刊本】	衆所知識者諸王王子大臣人民首釋	梵天王等皆識知故	復言聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆	善知故名	衆所知識	同上

- 【科註法華論】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋 梵天王等皆知識故又 證聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆 善知 故名 衆所知識 校合②の④
- 【大正摩提訖】 衆所知識者諸王王子大臣 帝釋 梵天王等皆知識故 復證聞菩薩佛等是勝智 彼勝智者皆 善知 故名 衆所知識 校合②の⑧
- 【摩提訖③⑨】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋天王梵天 等皆知識故又復證聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆 悉善知是故名 衆所知識 校合②の⑧
- 【大正留支訖】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋天王梵天王等皆知識故又復證聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆 悉善知是故名爲衆所知識 校合②の⑧

当該箇所を見ると、七寺本は敦煌本摩提訖と一致する。また七寺本は子注法華論ともほぼ一致するが、「知智」の異なりがある。叡山版は、七寺本・子注法華論にない「天王・又・悉・是」があり、菩提留支訖や勒那摩提訖別本に近い。「識知」知識」の異なりからも、七寺本・子注法華論は、叡山版と一致しない。七寺本・子注法華論と叡山版を同系統と見做す場合、七寺本・子注法華論は古い形を留めており、叡山版は留めていない。

校合②一八四頁～一八五頁

- 【七寺本】 九者人如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者 作 所應住持不退轉如經 能度無數日十衆生故 日本古写経データベース 貞元〇六八二
- 【子注法華論】 九者人如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者 作 所應住持不退轉如經 能度無量日十衆生故 校合②の①
- 【叡山版】 九者人如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者應作 所作住持不退轉如經名稱普聞無量世界 能度無量日十衆生故 叢書Ⅱ、影印五五
- 【敦煌摩提訖】 九者人如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者應作 所作住持不退轉如經 能度無量日十衆生故 校合②の⑦
- 【興聖寺寫本】 九者人如實境界不退轉 如轉如經到於彼岸故十者 作應所 所作住持不退轉如經 能度無量日十衆生故 摺稿「〇二三」四〇頁
- 【興聖寺刊本】 九者人如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者 作 所應住持不退轉如經名稱普聞無量世界 能度無數日十衆生故 同上
- 【科註法華論】 九者人如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者應作 所作住持不退轉如經 能度無數日十衆生故 校合②の④
- 【大正摩提訖】 九者人如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者應作 所作住持不退轉如經 能度無量日十衆生故 校合②の⑧
- 【摩提訖③⑨】 九者人如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者應作 所作住持不退轉如經名稱普聞無量世界 能度無量日十衆生故 校合②の⑧
- 【大正留支訖】 九者人如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者 作 所應住持不退轉如經 能度無數日十衆生故 校合②の⑧
- 【留支③⑨】 九者人如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者 作 所應住持不退轉如經 能度無數日十衆生故 校合②の⑧

当該箇所を見ると、七寺本は子注法華論とほぼ一致するが、「數」量」の異なりがある。「數」は菩提留支訳の要素で、「量」は勒那摩提訳の要素である。叡山版は七寺本・子注法華論にない「名稱普聞無量世界」があり、「應・住持」の位置も一致する『大正蔵』の勒那摩提訳の校本（三〇〇）宋本・元本・明本・宮内庁本）と一致する。「作所應」應作所」の異なりからも、七寺本・子注法華論は、叡山版と一致しない。七寺本・子注法華論と叡山版を同系統と見做す場合、七寺本・子注法華論は古い形を留めており、叡山版は留めていない。

校合②になし（譬喩品部分）

【七寺本】	即謂彼人我證此法	彼人不得此	對治此故與	諸聲聞授記	（日本后号経データベース 貞元〇六八二）
【慧日論底本】	即謂彼人我證此法	彼人不得此	對治此故與	聲聞記	『大正蔵』第四十五卷、四〇頁上、中
【慧日論甲本】	即謂彼人我證此法	彼人不得	對治此故與	聲聞記	同上
【慧日論異本】	即謂彼人我證此法	彼人不得	對治此故與	諸聲聞記	同上
【叡山版】	即謂彼人我證此法	彼人不得	對治此故與	諸聲聞授記	（叢書Ⅱ、影印二六六丁巻）
【敦煌摩提訳】	即 彼人我證此法	彼人不得此	對治	故與	聲聞授記（三一九頁下） ⁶²
【興聖寺寫本】	即謂彼人我證此法	彼人不得此	對治	故與	諸聲聞授記（拙稿「〇二二」B、六三頁）
【興聖寺刊本】	即謂彼人我證此法	彼人不得	對治此故與	諸聲聞授記	同上
【科註法華論】	即 彼人我證此法	彼人不得	對治此故與	諸聲聞授記	（卷五、十三丁表）裏 ⁶³
【大正摩提訳】	即 彼人我證此法	彼人不得	對治此故與	諸聲聞授記	同上
【摩提訳③④】	即 彼人我證此法故彼人不得此法	對治	故與	諸聲聞授記	『大正蔵』第二十六卷、一八頁上
【大正留支訳】	謂即 此人我證此法故彼人不得此	對治	故與	諸聲聞授記	『大正蔵』第二十六卷、八頁下

当該箇所を見ると、七寺本は「即謂彼」とある慧沼（六四八〜七一四年）撰『能顕中辺慧日論』所引の『法華

論』・興聖寺写本・興聖寺刊本・叡山版に近い。慧沼の『能顯中辺慧日論』は、『大正藏』第四十五卷に収録されており、『大正藏』の注記によると、その底本は藥師寺藏の宝曆十二年（一七六二年）書写本であり（慧日論底本）、甲本（慧日論甲本）は大日本統藏經本である。⁶⁴ 当該箇所には、甲本の中に「イ」で示される異本注記（慧日論異本）も確認されるが、それら三本の異同は僅かである。七寺本などに「即謂彼」とある箇所は、勒那摩提訳では「即彼」となっており、菩提留支訳では「謂即此」となっている。菩提留支訳と勒那摩提訳校本に見られる「此法故」の「故」は、古形の勒那摩提訳には見られないので、菩提留支訳由来と思われる。すなわち、当該箇所では七寺本系統の「即謂彼」、勒那摩提訳系統の「即彼」、菩提留支訳系統の「謂即此・故」と、テキストを三種に分類することができ、七寺本系統が現行本の両訳とは異なっていることがよく分かる。中国法相宗の第二祖慧沼は七世紀中期から八世紀前期の唐朝において活動した僧であり、⁶⁵ そうすると、金炳坤「二〇二〇A」で『法華經論述記』（以下、『述記』）と『子注』の事例が指摘されていたように、⁶⁶ 慧沼の事例からも唐代前期頃に七寺本と同系統の『法華論』が流布していたことになり、敦煌写本の中にも残っていない菩提留支訳『法華論』一卷本が、日本に伝わった後、平安時代まで祖型を留めたまま転写されていたことになる。

おわりに

以上、本解題では新出の日本古写經本である二種類の七寺本『法華論』（一卷本・二卷本）について紹介し、その内、一卷本の全文翻刻を公表するに当たって、『法華論』を巡る最近の研究動向や、七寺本『法華論』の翻刻作業を通して気付いたこと、及び七寺本を『法華論』諸本と対校して新たに分かったことなどを述べた。

とりわけ諸本対校によって、七寺藏『法華論』一卷本のテキストは、子注法華論との一致も多く、他系統の本

に依つて全体的にテキストが付加されたと見られる寛永二年版の叡山版古活字本に比して、古い形を留めている菩提留支訳の一卷本であることが分かった。さらに、七、八世紀頃に活動した慧沼『能顕中辺慧日論』所引の『法華論』の内容は、七寺本系統の『法華論』の内容との一致から同系統と認められるものであるため、現行の両訳とは異なり敦煌写本中にも残っていない七寺本系統のテキストが、唐代前期頃に確かに流布していたことが新たに分かった。これは金炳坤「二〇二〇A」における『述記』『子注』の事例から判明する古形の流支訳が八世紀初頭までに流布していたという指摘を、より強化する事例である。すなわち、七寺蔵『法華論』一卷本は、各種刊本大蔵経では伝わらなかったが、唐代長安写経の系譜に連なる奈良朝写経を転写した七寺一切経には伝わった、古形の菩提留支訳『法華論』一卷本なのである。

本解題・翻刻は、七寺蔵『法華論』一卷本を中心としたものであったが、七寺には上下二巻本の菩提留支訳『法華論』も現存しており、聖語蔵本・金剛寺一切経本・房山雲居寺石経本・高麗初雕版・金蔵広勝寺本・福州版などに伝わる二巻本の菩提留支（或いは流支）訳との関係についても興味深い研究課題であるため、今後取り組みたい。

【附記】

稲園山七寺所蔵の『妙法蓮華経優婆提舍』古写本の翻刻及び画像掲載の許可を賜りました七寺御住職蟹江良輝氏に、謹んで御礼申し上げます。

注

(1) 落合俊典「二〇二四」には『大正新脩大蔵経』などの活字資料やそのテキストデータ（SAT、CBETA）にだ

け依拠するのは今日の研究手法ではないと考えられる。池麗梅・佐久間秀範・室屋康孝・藤原智・林寺正俊・深見慧隆など日本古写経を用いて斬新的研究が拓かれている」(一三九頁)とある。

- (2) 望月海慧・金炳坤編『妙法蓮華経優婆提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、身延山大学国際日蓮学研究所、二〇一〇年。

- (3) 国際仏教学大学院大学・日本古写経研究所編『日本現存八種一切経対照目録』改訂版(以下、『八種目録』)、二〇二一年、一四七頁。

- (4) 京都市上京区に所在する臨済宗の円通山興聖寺には、菩提流支訳『妙法蓮華経憂波提舍』一卷本と、菩提留支訳『妙法蓮華経優婆提舍』二巻本が所蔵されている。

- (5) 金炳坤 [110111A] [110111B] [110111C]。

- (6) 『七寺目録』五九頁上段(現存目録)、一四九頁上段(復原目録)。

- (7) 日本古写経データベース更新情報 <https://www.icabs.ac.jp/news/koshakyo> (参照 二〇二四年九月二十八日)によると、七寺所蔵の『法華経論』の計三巻分は、二〇二二年十一月二十一日付けで日本古写経データベースに掲載されている。

- (8) なお興聖寺蔵の院政期写本(一巻本)は菩提流支訳。

- (9) 望月海慧・金炳坤編『妙法蓮華経優婆提舍の文献学的研究』所収(六九頁～一〇五頁)の影印。

- (10) 拙稿「諸注釈家所引の法華論について―法華十七異名を中心に―」(福士慈稔博士追悼論文集『東アジアにおける法華天台仏教の研究』法華経研究叢書第Ⅲ巻所収、二〇二五年刊行予定)は、日本古写経本『法華論』を用いた研究成果の一つである。併せて参照されたい。

- (11) 落合俊典「二〇二四」には「近年は平安鎌倉写経を中心とした日本古写経データベース(国際仏教学大学院大学日本古写経研究所)の運用が軌道に乗り始めて相当な経巻が閲覧できるようになってきた。もともとネットで経巻の全てが

七寺一切経本『妙法蓮華経優婆提舍』解題・翻刻(浅野)

閲覧できるシステムにはなっていない。巻首の一面面が見られるだけである。これは所蔵寺院の貴重な画像が不用意にハッキングされて商用に転売されるのを懼れるからである。重要な知的財産保持の方策であるが、東京在住でない国内外の研究者にとつては不便であり、上京もしくは来日して東京都文京区春日二丁目にある国際仏教学大学院大学の図書館に來なければ全巻の閲覧ができないのである」（一四〇頁上段）とある。

- (12) 『七寺目録』一八四頁。以下、本章では『七寺目録』と、稲園山七寺公式ホームページ <https://nanatsudera-osu.com/>（参照二〇二四年九月二十八日）などを参考にした。

- (13) 赤尾栄慶「二〇〇〇」七九〇頁。

- (14) 落合俊典「一九九四」四三三頁。

- (15) 同上。

- (16) 牧田諦亮監修・落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書』第一卷、i頁。

- (17) 同上、ix頁。

- (18) 落合俊典「一九九四」四三六頁。伊久間洋光「二〇二〇」には「七寺には、平安時代末期の書写になる、所謂七寺一切経が蔵されている。一九九〇年、落合俊典教授の報告により、その七寺一切経が宋代の版本の系統ではなく唐代の写本の系統であり、さらに多数の古逸經典を含んでいることが明らかになった」（三頁）とある。

- (19) 『七寺目録』二一〇頁。

- (20) 落合俊典「一九九四」四三八頁。

- (21) 落合俊典「一九九四」には「多度神宮寺や熱田神宮寺の豊富な經藏のことを併わせ考えると無記のものの大半は、濃伊勢を含めた尾張の地に既に存在していたものと推測して差し支えないであろう。しかもそれらは當時傳來して崇敬された北宋勅版一切經（蜀版）系のものではなく、奈良朝以來の書寫一切經が中心を成したのであろう。そのことを證

する包括的な本文研究は今後に俟たなければならない」(四七二頁)とある。

- (22) 同上四五九頁～四六〇頁。
- (23) 望月海慧「二〇二〇」六頁～七頁。
- (24) 『大正蔵』第四十卷所収。
- (25) 『大正蔵』第三十四卷所収。
- (26) 同上。
- (27) 同上。
- (28) 『大正蔵』第三十三卷所収。
- (29) 『大正蔵』第三十四卷所収。
- (30) 同上。
- (31) 『伝教大師全集』卷三所収。
- (32) 『智證大師全集』上卷所収。
- (33) 大竹晋「二〇一一」一二六頁。同上頁で大竹氏は『妙法蓮華經憂波提舍』の翻訳期から吉蔵の活動期に至るまで、この論が中国においてほとんど研究されなかったことが知られる(ただし、まったく注目されなかったわけではなく、北朝の地論宗の慧遠は『大乘義章』などにおいてこの論を引用している)と指摘している。
- (34) 大正蔵本の二種の『法華論』は、芝増上寺蔵の高麗再雕版を底本とし、宋本、元本、明本、宮内庁本を校本としている。『大正蔵』では聖語蔵本を校本に用いることもあるが、『大正蔵』所収の『法華論』では用いていない。聖語蔵には、計五点(通卷No. 1847, No. 3455, No. 3456, No. 3972, No. 3973)の『法華論』が現存する。
- (35) 智昇『開元釈教録』巻第六には「法華經論二卷(題云妙法蓮華經優波提舍。或一卷。曇林、筆受並製序。第二出。與七寺一切經本『妙法蓮華經優波提舍』解題・翻刻(浅野)

七寺一切経本『妙法蓮華経優婆提舍』解題・翻刻（浅野）

二六

前寶意出者同本。初有歸敬頌者、是見續高僧傳。」（『大正蔵』第五十五卷、五四〇頁中四）とある。

(36) ①清水梁山「一九二一」、②三井晶史編『昭和新聞国訳大蔵経』論律部第九卷所収の国訳（一九三二年刊行）、③藤井教公・池邊宏昭ほか「二〇〇一」、藤井教公・池邊宏昭「二〇〇二」「二〇〇三」、④大竹晋「二〇一一」。

(37) 藤井教公・池邊宏昭ほか「二〇〇一」二三頁～二四頁。望月海慧「二〇一〇」八頁では、BDK Tripiṭaka Translation Seriesに収録されたアボットの英訳（二〇一三年発行。Terry Rae Abbott「一九八五」に基づく英訳）を紹介している。

(38) 奥野光賢「二〇二〇」では、桑名氏の論考に言及している。

(39) 桑名法晃「二〇二〇」には「大蔵経所収テキストとは別系統のテキストが、近世日本においては少なくとも寛永二年に古活字版として刊行され、正保三年より整版として刊記部分を改めて刊行されていた」（六三頁）とある。

(40) 金天鶴「二〇二〇」六頁。

(41) 金天鶴「二〇二〇」には『法華経論子注』は、現在、正倉院聖語蔵に保管されている写本と称名寺所蔵（神奈川県立金沢文庫管理）の写本が伝わっている。前者は上巻であり、後者は下巻である」（一頁）とあり、また『子注』は三巻で構成されているが、現在は上巻のほとんど全部と下巻の一部だけが存在して中巻は欠落された」（七頁）とある。

(42) 同上二四頁。

(43) 金炳坤「二〇二〇B」一七頁。

(44) 同上二三頁。

(45) 叢書Ⅱ以降に出された氏の文献学的研究の成果には、金炳坤「二〇二二A」「二〇二二B」「二〇二三」「二〇二四」などがある。特に金炳坤「二〇二四」では『法華論』の三訳九本の層位関係などが示されるなど、それまでの研究成果が纏められており、示唆に富む内容である。

(46) 拙稿「二〇二二」。

- (47) 同上二二頁～二二頁。
- (48) 黒板勝美「一九三六」六頁。
- (49) 令和五年（二〇二三年）度日本古写経研究所第二回公開研究会における発表原稿を基にした拙稿「真福寺本『妙法蓮華経憂波提舍』の本文系統と資料的意義」は、『日本古写経研究所研究紀要』第十号に掲載予定（二〇二五年刊行予定）。
- (50) 『七寺目録』一九六頁。
- (51) 『七寺目録』の「解説」の別表三には「永芸・栄芸 智観坊」（二〇四頁）とある。
- (52) 『七寺目録』一九二頁。赤尾栄慶「二〇〇〇」八〇〇頁～八〇一頁。
- (53) 赤尾栄慶「二〇〇〇」八〇二頁。
- (54) 『七寺目録』一八六頁。
- (55) 拙稿「二〇二二B」二二頁。
- (56) 『八種目録』一四七頁。
- (57) 日本古写経データベースのトップページ <https://koshakyo-database.icabs.ac.jp/>（参照 二〇二四年九月二十九日）には、「データのセキュリティ上の問題や古写経を蔵する寺院の所有権があるために、インターネット上で表示されるのは経巻冒頭部の画像（一カット分）のみとなっています。経巻全体のデジタル画像の閲覧は本学内においてのみ許可されており、閲覧を希望する方には本学図書館内での閲覧が認められます（二〇一〇年四月以降）」とある。
- (58) 金炳坤「二〇二〇B」一二〇頁。
- (59) 興聖寺蔵の院政期写本（一巻本）の訳者名表記は「照玄沙門都三藏法師菩提流支訳」となっている。
- (60) 金炳坤「二〇二〇C」を嚆矢とし、同「二〇二二A」「二〇二二B」「二〇二三」はその改訂版である。
- (61) 神田大輝「二〇二二」参照。金炳坤「二〇二〇B」一九頁。

七寺一切経本『妙法蓮華経優婆提舍』解題・翻刻（浅野）

二六

- (62) 黄永武博士主編《敦煌寶藏》第二〇冊、新文豐出版公司、一九八一年。
- (63) 龍谷大学図書館貴重資料画像データベース <https://dalibrary.ryukoku.ac.jp/page/220309>（参照：二〇二四年十月一日）
- (64) 『大正蔵』第四十五卷、四〇八頁。
- (65) 同上四二〇頁上。
- (66) 金炳坤「二〇二〇A」七頁～八頁。

【凡例】

一 本翻刻は七寺蔵の菩提留支訳『妙法蓮華經優婆提舍』一卷（平安末期写本）を底本として、全文を翻刻したものである。

二 校本には身延山大学国際日蓮学研究所蔵の菩提留支訳『法華論』一卷（叡山版古活字本、寛永二年版。望月海慧・金炳坤編『妙法蓮華經優婆提舍の文献学的研究』所収の影印）を用い、底本との異同を注記した。

① 校本の略譜は【韻】とした。

② 底本における誤脱・衍字などを判定するため、疑いのある箇所については、校本のほかに、（序品部分が公表されている）金炳坤「〈資料〉『法華論』諸本校合（二）」（以下、校合②）を参照し、問題箇所を注記で指摘した。その際、「校合②（該当ページ数）」の形でロケーションを示した。

③ 方便品以降の誤脱・衍字などの判定については、拙稿「二〇二二B」で翻刻した興聖寺所蔵の院政期写本と、『大正蔵』第二十六卷所収の勒那摩提訳および菩提留支訳の『法華論』テキストを参照し、問題箇所を注記で指摘した。勒那摩提訳・菩提留支訳の参照は、『大正蔵』の校本（宋本・元本・明本・宮内庁本）も含む。各テキストのロケーションは、興聖寺本は「興・該当行数」、勒那摩提訳は「摩・該当ページ・段」（摩提訳の校本「摩・該当ページ・段・注番号」、菩提留支訳は「留・該当ページ・段」（留支訳の校本は取り上げる箇所なし）の形で示した。なお序品における諸本（校合②）参照と区別するため、方便品以降では注記する際に、「諸テキスト」とした。

三 翻刻に当たっては、以下の方針に基づいた。

- ① 改行は底本に従った。
- ② 各紙の一行目の行末に丁付を（ ）で示した。なお第一紙のみ、ページ幅の都合から一行目の行末の左側に付した。
- ③ 各行頭に行番号を付した。
- ④ 漢字の字体は、原則として底本の字体に従うことに努めたが、活字フォントに存在しない異体字・難字などについては最も近い字体を用いた場合もある。
- ⑤ 以下の例のように、底本で統一されていない異体字は、原文どおりに翻刻した。
例…脩・修、障・鄣、歎・嘆、捻・惣、體・躰、回・因、慧・恵、密・蜜、叡・發
- ⑥ 誤脱・衍字などと認められる箇所でも、原文どおりに翻刻したが、衍字・衍文については、私に二重取り消し線を引いた。
- ⑦ 句読点、中黒点を私に付した。
- ⑧ 底本の挿入符・（字の上側に付される）倒置符は、○で示した。
- ⑨ 破損等があっても判読可能な場合は、該当字を□で囲んだ。
例…32〇如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山
- ⑩ 底本には、文字を擦り消した・擦り消そうとした箇所がある。当該箇所については、読み取れる字をグレーで示し、網かけにした。

例…147 尊重讃歎。如経

四 底本の書誌は以下の通りである。記述に当たっては、令和三（二〇二一）年十二月二十日から二十三日にかけて、日本古写経研究所が実施した七寺一切経実地調査に参加する機会を得た筆者が、実物を調査し作成した調書の情報を基にした。

名古屋市中区大須に所在する、七寺（稲園山長福寺）所蔵の古写本

〔外題〕妙法蓮華経優婆提舍（銀字打ち付け書）

〔内題〕妙法蓮華経優婆提舍

〔尾題〕妙法蓮華経優婆提舍一卷

〔撰者〕婆藪槃豆菩薩造

〔訳者〕三藏法師菩提留支譯

〔装丁〕卷子本一卷

〔時代〕平安時代末期

〔箱番号〕仮十九函（甲復三函）

〔裏打ち〕部分

〔表紙〕有 縦二十六糎九耗 横二十二糎九耗

〔軸〕無

〔界線〕天地朱界縦墨界

〔存欠〕完本

〔状態〕良好

〔紙質〕楮打紙（黄檗染）

〔第二紙〕一紙二十七行十六字前後

縦二十六糎八耗 横四十九糎四耗

界高二十糎六耗 界幅一糎九耗

天界三糎 地界三糎二耗

〔法量〕第一紙から第三十二紙は、四十一糎九耗―

四十九糎七耗の間。第三十三紙は、十三糎

九耗。全三十三紙

〔奥書〕一交了 永藝

〔備考〕紙本墨書。墨書による校合。表紙に文様あり、濃い茶渋色に染められているため不鮮

明。

七寺一切經本『妙法蓮華經優婆提舍』解題・翻刻（浅野）

【翻刻】

（表紙に文様あり、濃い茶洪色に染められているため不鮮明）

妙法蓮華經優婆提舍

（表紙）

1 妙法蓮華經優婆²提舍 婆數盤³豆菩薩造 三藏法師菩提留支⁵譯
 2 頂札正覺海 淨法无為僧 為深利智者 開示毗伽典 (第一紙)
 3 敬札⁷牟尼尊 及菩薩聲聞 令法自利他 略出勒伽論
 4 歸命過去世⁸ 現在佛菩薩 弘慈降神力 願施我无畏
 5 大悲止四魔 護菩提增長
 6 經曰。歸命一切諸佛菩薩。
 7 如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與
 8 大比丘衆万二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已
 9 盡、无復煩惱、心得自在、善得心解脫、善得慧
 10 解脫、心善調伏、人中大龍。應作者作、所作
 11 已辨、離諸重擔、逮得已利、盡諸有結、善得
 12 正智心解脫、一切心得自在、到第一彼岸。菩
 13 薩摩訶薩¹⁴万人。皆於阿耨多羅三藐三
 14 菩提不退轉、皆得陀羅尼、大辯才⁹樂說、轉
 15 不退轉法輪。供養无量百千諸佛、於諸佛
 16 所種諸善根、常為諸佛之所稱歎、以大慈
 17 悲而脩身心、善入佛慧、通達大智、到於彼
 18 岸、名稱普聞无量世界、能度無數百千衆
 19 生。

1 (法華論) + 敬
 2 婆波 敬
 3 盤 敬
 4 (此云天親) + 敬
 5 留流 敬
 6 (奉詔) + 敬
 7 敬札 祇虔 敬
 8 去 未 敬
 9 辯才 辨財 敬
 10 歎 嘆 敬
 11 慧 惠 敬

底本の当該箇所は「敬」の異体字か。

- 20 論曰。此法門中、初第一品、明七種功德成就。何
 21 等七。一者、序分成就。二者、衆成就。三者、如
 22 來欲說法時至成就。四者、所依說法隨順
 23 威儀住成就。五者、依止説回成就。六者、大
 24 衆欲聞法現前成就。七者、文殊師利荅成
 25 就。
 26 又序分成就者、此法門中、示現二種勝義成（第二紙）
 27 就、應知。何等為二。一者、示現一切法門中
 28 寂勝義成就。〇。二者、示現自在功德義成就
 29 故。如王舍城、勝諸餘一切城舍、耆闍崛
 30 山、勝諸餘山故、顯此法門寂勝義故。如經、
 31 繚¹⁹
 32 〇如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山
 33 中故。衆成就者、有四種義、成就應知。何等
 34 為四。一者、數成就。二者、行成就。三者、攝功
 35 德成就。四者、威儀如法住成就。一數成就
 36 者、謂大衆無數故。二行成就者、有四種。
 37 一者、諸聲聞、脩小乘行。二者、諸菩薩、
 38 修大乘行。三、者²⁴諸菩薩、神通自在²⁶、隨

12 (經) + 觀
 13 (爲) + 觀 「爲」は校合②（一五八頁）一五九頁の
 諸本にあり、底本は脱字。
 14 止上 + 觀
 15 (諸) + 觀 「諸」は校合②（一六〇頁）一六一頁の
 諸本にあり、底本は脱字。
 16 (故) + 觀 底本には補入記号の右に「故」とあり。
 17 (於) + 觀
 18 諸餘 + 餘諸 + 觀
 19 經經 + 經 + 觀 底本の当該箇所は、一字毎に見せ消
 記号が付されており、「經經」となっている。二字目の
 20 「經」は衍字であるため、私に打ち消し線を引いた。
 底本には補入記号の右に「如經」とあり。
 21 (住) + 觀
 22 脩 + 修 + 觀
 23 (謂) + 觀
 24 (謂) + 觀
 25 (以) + 觀
 26 (力) + 觀

39 時示現、能行衆行。如毘陀婆羅²⁸十六
 40 賢十一、具足菩薩不可思議事、而常示
 41 現種種形相。毘陀婆塞・優婆夷・比丘・比
 42 丘尼等故。四者、出家聲聞人、威儀一之。
 43 不同菩薩故。皆是阿羅漢等者、十六句。
 44 示現聲聞功德成就故。皆於阿耨多羅
 45 三藐故。阿羅漢功德成就者、彼十六句、
 46 示現三種門攝義、應知。何等三門。一者、
 47 上上起門。二者、揔別相門。三者、攝取事
 48 門。上上起門者、諸漏已盡³⁵故、名為阿羅³⁴。
 49 以心得自在故、名諸漏已盡。以無復煩
 50 惱故、名心得自在。以善得心解脫、善得慧
 51 解脫故、名心得自在。以遠離能見故、名無
 52 復煩惱。已善得心解脫³⁹、慧解脫故、名心善
 53 調伏。人中大龍者、行諸惡道、如平坦路
 54 无所拘⁴⁰導、應行者已行、應到處已到故。
 55 應作者⁴¹作、人中大龍、已對治、降伏煩惱
 56 怨敵故。所作已辦者、更不後生、如相應
 57 事已成就⁴⁴故。離諸重擔者、已應作者作、

27 (脩) + (觀)
 28 (菩薩) + (觀)
 29 十一「士」(觀) 校合②(二六三頁)一六四頁の諸本
 では、「士」となっており、底本の「十一」は誤写。
 30 (有) + (觀)
 31 (三菩提不退轉等者有十三句示現菩薩功德成就) + (寛)
 「三菩提」は校合②(二六五頁)の諸本にあり、底本は
 脱文。
 32 (種) + (觀)
 33 (謂) + (觀) 「謂」は校合②(二六六頁)一六七頁の
 諸本にあり、底本は脱字。
 34 (漢) + (觀) 「漢」は校合②(二六六頁)一六七頁の
 諸本にあり、底本は脱字。
 35 (諸漏已盡故名爲羅漢) + (觀)
 36 (心) + (觀)
 37 (所見) + (觀)
 38 (已) + (觀)
 39 (善得) + (觀)
 40 拘 || 拘 (觀)
 41 (已) + (觀)
 42 (者) + (觀)
 43 (得) + (觀)
 44 就 || 辨 (觀)

76 法相應不疲倦故。七者、應靜坐空閑處、
75 慧、速觀察法故。六者、應不疾不遲說法、如
74 故。四者、應降伏諸外道等故。五者、應以智
73 大衆、教化一切故。三者、應入聚落・城邑等
72 受飲食・卧具・供養・恭敬等故。二者、應將
71 有十五種應義、應知。何等十五。一者、應
70 是捨、餘句別故。皆是阿羅漢者、彼羅漢、
69 捨別相門者、皆是⁵³羅漢等十六句、⁵⁴初句
68 所知識。
67 等、是勝智者。彼勝智者、皆善知。故名衆
66 釋・梵天王等、皆識知故。⁴⁹復聲聞・菩薩・佛
65 故。衆所知識者、諸王・王子・大臣・人民・帝
64 德故。大阿羅漢等者、心得自在、到彼岸⁴⁷
63 智心得解脫、善得神通、无諍三⁴⁶等諸功
62 道脩道智故。到第一彼岸者、善得正⁴⁵
61 者、諸漏已盡故。一切心得自在者、善知見
60 得已利、斷諸煩惱因故。善得正智心解脫
59 者、已捨重擔、證涅槃故。盡諸有結者、已逮
58 所作已辦、後生重擔已捨離故。逮得已利

45 脩^{||}修【觀】

46 【昧】+【觀】「昧」は校合②（二六九頁）一七〇頁の

諸本にあり、底本は脱字。

47 【第二】+【觀】

48 【天王】+【觀】

49 識知^{||}知識【觀】

50 【又】+【觀】

51 【悉】+【觀】

52 故^{||}是【觀】

53 【阿】+【觀】

54 【中】+【觀】

55 【阿】+【觀】

56 【名之爲應】+【觀】

57 【應】+【觀】

58 【諸】+【觀】

59 倦^{||}倦【觀】

- 77 飲食・衣服・一切資生不積不聚、少欲知
 78 足故。八者、應一向行善行、不著諸禪故。
 79 九者、應行空聖行故。十者、應行无相聖行
 80 故。十一者、應行无願聖行故。十二者、應
 81 降伏世間禪淨心故。十三者、應起諸通
 82 勝功德故。十四者、應證第一義勝功德故。
 83 十五者、應如實知同生衆生、得諸功德、為
 84 利益一切諸衆生故。
 85 攝取事門者、此十五句、攝取十種功德、
 86 應知。示現可說果・不可說果故。何尋為
 87 十。一者、攝取⁶¹功德、二句示現。如經、諸漏已
 88 盡、无復煩惱故。二者、三句攝取諸功德。一
 89 句、降伏世間功德。如經、心得自在故。二句、
 90 降伏出世間學人功德。如經、善得心解脫、
 91 善得慧解脫故。三者、攝取不違功德。隨
 92 順如來教行故。如經、心善調伏故。四者、攝
 93 取勝功德。如經、人中大龍王⁶²故。五者、攝取
 94 所應作勝⁶³功德。所應作者、謂依法、供養・恭
 95 敬・尊重如來故。如經、應作者作故。六者、攝

- 96 取滿足功德。滿足學地故。如經、所作已辨
 97 故。七者、三句攝取過功德。一者、過愛故。二
 98 者、過求命供養・恭敬故。三者、過上下界。已
 99 過學地故。如經、離諸重擔。逮得已利。盡諸
 100 有結故。八者、攝取上上功德。如經、善得正
 101 智心解脫故。九者、攝取應作利益衆生功
 102 德。如經、一切心得自在故。十者、攝取上首
 103 功德。如經、圓第一彼岸故。彼諸菩薩功德（第五紙）
 104 成就者、有十三句。二門攝義示現、應知。何
 105 等為二門。一者、上支下支門。二者、攝取事
 106 門。上支下支門者、所謂捨相・別相、應知。皆
 107 於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者、是捨
 108 相。餘者、是別相。彼不退轉、有十種示現。⁶⁸何等
 109 為十。一者、住聞法不退轉。如經、皆得陀羅
 110 尼故。二者、樂說不退轉。如經、大辯才樂說
 111 故。三者、說不退轉。如經、轉不退轉法輪故。四
 112 者、依止善知識不退轉。⁷⁰以身心葉、依色身
 113 攝取故。如經、供養无量百千諸佛故。於
 114 諸佛所、種諸善根故。五者、斷一切疑不退

63 〔彼〕〔歡〕
 64 〔功德〕+〔歡〕
 65 〔為〕〔歡〕
 〔為〕は校合②（二七九頁—一八〇頁）の諸本になし。
 66 〔此義〕+〔歡〕
 67 於_レ得〔歡〕
 68 〔應知〕+〔歡〕
 69 才_レ財〔歡〕
 70 〔已〕+〔歡〕

115 轉。如經、常為諸佛之所稱嘆⁷¹故。六者、為何
 116 尋何尋事說法、入彼法不退轉。如經、以大
 117 慈悲、而脩身心故。七者、入一切智如實境
 118 界不退轉。如經、善入佛慧故。八者、依我
 119 空・法空不退轉。如經、通達大智故。九者、
 120 入如實境界不退轉。如經、到於彼岸故。
 121 十者、作所應⁷⁴作住持不退轉。如經、能度无
 122 數百千衆生故。⁷⁶
 123 攝取事門者、示現諸菩薩、住何等清淨地
 124 中、回何等方便、於何等境界中、應作所作
 125 故。地清淨者、八地已上三地无相行、寂靜
 126 清淨故。⁷⁷方便者、有四種。一者、攝取妙法方
 127 便。住持妙法、以樂說力、為人說故。二者、攝
 128 取善知識方便。以依善知識、所作應作故。^{（第六紙）}
 129 三者、攝取衆生方便。以不捨衆生故。四者、
 130 攝取智方便。以教化衆生、令入彼智故。境
 131 界者、易解。復有攝取事門。示現諸地攝取
 132 勝功德、不同二乘功德故。⁷⁹第八地中、无功用
 133 智、不同上下故。⁸⁰不同下者、⁸¹下功用行、不能動

71 嘆¹歎【觀】
 72 「彼」+【觀】「彼」は校合②（一八三頁）一八四頁の
 諸本にあり、底本は脱字。
 73 脩¹修【觀】
 74 作所應¹應作所【觀】
 75 （名稱普聞無量世界）+【觀】
 76 數¹量【觀】
 77 （地）+【觀】
 78 （更）+【觀】
 79 （諸）+【觀】
 80 上下¹上下【觀】「上下」の用例は、校合②（一八八頁）
 一八九頁の諸本になし。
 81 （功）+【觀】

- 134 故。不同上者、⁸²无相行不能動故、自然而行
 135 故。於第九地中、得勝進陀羅尼門、具足
 136 四无碍自在故。⁸³於十地中、轉不退轉法輪、
 137 得受佛位、⁸⁴轉輪王太子故。以得同攝功
 138 德義故。三攝功德成就者、示現依何處・依
 139 何心・依何智・依何等境界行・依何等能辨
 140 故。依何處者、依善知識故。依何心者、我
 141 依⁸⁶衆生心、教化畢竟、利益一切衆生故。
 142 依何智者、依三種智。一者、授記⁸⁷蜜智。二者、
 143 ⁸⁸通智。三者、真實智。依何等境界行・依何等
 144 能辨者、即三種智所攝、應知。四威儀如法
 145 住成就者、有四種示現。何等為四。一者、四⁸⁹
 146 衆園遶。二者、前後。三者、供養・恭敬。四者、
 147 尊重・讚歎。⁹⁰如⁹¹經
 148 ○尔時世尊、四衆園遶、供養・恭敬・尊重・讚歎
 149 故。如來欲說法時至成就者、為諸菩薩
 150 說大乘經故。此大乘脩多羅、有十七種名。
 151 顯示甚深功德、應知。何等十七。云何顯示。
 152 一名无量義經者、成就字義故。以此法門、

82 「上」+【觀】「上」は校合②（二八八頁）一八九頁の

諸本にあり、底本は脱字。

83 【智】+【觀】

84 【第】+【觀】

85 【境界】+【觀】

86 【度】+【觀】

87 蜜+密+【觀】

88 【諸】+【觀】「諸」は校合②（一九二頁）一九三頁の

諸本にあり、底本は脱字。

89 【四】+【觀】

90 底本の「如經」は擦り消されている。寛永二年版の当該

箇所には「如經」あり。

91 底本には補入記号の右に「如經」とあり。

92 脩+修+【觀】

153 說方便、說甚深法妙境界故。彼甚深法（第七紙）
 154 妙境界者、諸佛如來、寂勝境界故。
 155 二名寂勝脩多羅者、於三藏中、寂勝妙
 156 藏、義成就故。三〇大方廣者、无量大乘⁹⁸
 157 門、隨順衆生根、住持成就故。四名教
 158 菩薩法者、為教化根熟菩薩、隨順法、善
 159 成就故。五名佛所護念者、依佛如來、
 160 有此法故。六名一切諸佛秘密法者、
 161 此法甚深、如來知故。七名一切諸佛藏者、
 162 如來功德、三昧之藏、在此經故。八名一切
 163 諸佛秘密處者、根未熟衆生、非受法
 164 器、與授故。九名能生一切諸佛經者、聞
 165 此法門、能成諸佛大菩提故。十名一切
 166 諸佛道場者、聞此法門、能成阿耨多
 167 羅三藐三菩提、非餘脩多羅故。十一名
 168 一切諸佛所轉法輪者、以此法門、能破
 169 一切諸佛障導故。十二名一切諸佛堅固
 170 舍利者、謂如來真如法身、於此脩多羅、
 171 不壞故。十三名一切諸佛大巧方便經者、

93 〔說〕+〔觀〕
 94 〔彼〕+〔觀〕
 95 脩多羅
 96 義同此法門中善〔觀〕
 97 〔名〕+〔觀〕 底本には補入記号の右に「名」とあり。
 98 〔法〕+〔觀〕
 99 〔以〕+〔觀〕
 100 〔器〕+〔觀〕 校合②（一九七頁）一九八頁の諸本では
 〔器〕が、「法」の下（法器 か「法」の上〔器法〕に置
 かれてゐるため、底本は「器」が脱字。
 101 〔唯佛〕+〔觀〕
 102 〔之〕+〔觀〕
 103 〔以〕+〔觀〕
 104 〔等〕+〔觀〕
 105 與授不授與〔觀〕「不」は校合②（一九二頁）一九三
 頁の諸本にあり、底本は脱字。
 106 〔諸佛〕+〔觀〕
 107 脩多羅
 108 〔佛〕+〔觀〕「佛」は校合②（二〇〇頁）の諸本になく、
 意味が通じない衍字のため、私に打ち消し線を引いた。
 109 〔經〕+〔觀〕
 110 脩多羅
 111 〔毀〕+〔觀〕

172 依此法門、成大菩提已、¹¹²衆生説天・人・聲
 173 聞・辟支佛等、諸善法故。十四名説一乘
 174 經者、此法門、顯示如来阿耨多羅三藐
 175 三菩提究竟之體、彼二乘、非究竟故。¹¹⁴
 176 十五名第一義住者、此法門、即是如来
 177 法身、究竟住處故。十六名妙法蓮華者、
 178 有二種義。何等二種。一者、出水義。以不可
 179 盡、出離小乘泥濁水故。復有義。如蓮華
 180 出泥水、喻諸聲聞、得入如来大衆中坐。
 181 如諸菩薩、坐蓮華上、聞説如来无上智
 182 慧清浄境界、得證如来深密藏故。二者、
 183 華開義。諸衆生、於大乘中、其心怯弱、不
 184 能生信、是故開示如来浄妙法身、令生信
 185 心故。十七名寂上法門者、攝成就者、攝
 186 取无量名句字身。頻婆羅阿闍婆等、舒
 187 盧迦¹²⁰云故。此十七句法門者是、餘句是
 188 別。¹²¹如¹²²經¹²³
 189 ○為諸菩薩説大乘經名无量義、如是尋故。
 190 所依説法随順威儀住成就者、示現依何

112 「爲」＋「觀」 「爲」は校合②（二〇一頁―二〇二頁）の諸本にあり、底本は脱字。

113 「以」＋「觀」

114 「道」＋「觀」

115 密¹¹⁶蜜¹¹⁷「觀」

116 「以」＋「觀」

117 「諸佛」＋「觀」

118 上¹¹⁹勝¹²⁰「觀」

119 「攝成就故」＋「觀」 「攝成就故」は校合②（二〇五頁―二〇六頁）の諸本にあり、底本は脱字。

120 「偈」＋「觀」 寛永二年版では当該箇所が割注で「云々」（八丁表）となつてゐる。「偈」は校合②（二〇五頁―二〇六頁）のIIを除く諸本にあり、文脈上から底本は脱字。なお脱字の「偈」は、「云」の下に置いて「云々云偈故」とするのが本来の形であらう。

121 「總」＋「觀」 「總」は校合②（二〇六頁）の諸本にあり、底本は脱字。

122 「故」＋「觀」

123 底本の「如経」は擦り消されている。寛永二年版の当該箇所には「如経」あり。

124 底本には補入記号の右に「如経」とあり。

191 尋法說法。依三種法故。一者、依三昧成就。
 192 故以三昧成就、二種法示現。何等為。一者、
 193 成就¹²⁶二種自在力。身心不動故。二者、離一切
 194 諸¹²⁷郭。隨自在力故。此自在力、復有二種。一
 195 者、為隨順衆生對治、攝取覺菩提分法¹³⁰
 196 故。二者、為對治无量世來、堅執煩惱故。
 197 如經、佛說此經已、結跏趺坐。入於无量義處
 198 三昧¹³³。二者、器世間。三者、依衆生世間。振
 199 動世界、及知過去无量劫事等故。
 200 如經、是時天雨曼陀羅華、乃至歡喜合掌、
 201 一心觀佛故。依止說曰成就者、彼諸大衆、（第九紙）
 202 現見異相不可思議事。如來今者、應為
 203 我說。渴仰欲聞、生希有心、名依止說因
 204 成就。是故如來放大光明、示現諸世界
 205 中、種種事故。先示現外事六種振動¹³⁶等。
 206 次示現此法門中、內證甚深秘密法故。
 207 又依器世間・衆生世間、數種種¹³⁷、量種種、
 208 具足煩惱耆別、具足清淨耆別、佛法弟
 209 子耆別、示現三寶故。復乘耆別。有世界

125 (二) + 【觀】 当該箇所について、校合② (二〇七頁～二〇八頁) の諸本では、「何等爲二」があるか、全くないかで分かれるため、底本は「二」が脱字。
 126 (二種) + 【觀】 「二種」は校合② (二〇七頁～二〇八頁) の諸本になく、衍字か。
 127 (礙) + 【觀】
 128 (示現) + 【觀】
 129 (者) + 【觀】
 130 (不見) + 【觀】 「不見」は校合② (二〇八頁) の諸本にあり、底本は脱字。
 131 (者) + 【觀】
 132 執 || 報 + 【觀】
 133 (故) + 【觀】
 134 (依) + 【觀】 「依」は校合② (二〇九頁～二一〇頁) の諸本にあり、底本は脱字。
 135 (爲大衆) + 【觀】
 136 振 || 震 + 【觀】
 137 (無) + 【觀】

210 有佛。有世界无佛。令衆生見修¹³⁸行者未
211 得果、得道者已得果。如經、諸修行得道
212 者故。數種種者、示現種種觀故。略說四
213 種觀。一者食。¹⁴⁰二者聞法。三者修行。四者
214 樂。
215 如經、余時佛、放眉間白豪¹⁴¹相光、乃至以
216 佛舍利、起七寶塔故。行菩薩道者、教化
217 衆生、依四攝法方便攝取、應知。如經、所
218 說、當自推取。自此以下、示現大衆現前
219 欲聞法成就。問一人者、多人欲聞、生希
220 有心。是故唯問文殊師利。如是示現世
221 尊弟子¹⁴²、隨順於法不相違故。今佛世尊、
222 現神變相者、為何等義。¹⁴⁵為現大相曰
223 故。為現大相者、為妙法蓮華經故、現大瑞
224 相。為說如來所得妙法、不可思議等文¹⁴⁷
225 句故。有二種義、是故仰推文殊師利。¹⁴⁸
226 一者、現見諸法。¹⁴⁹二者、離諸曰、唯自內心¹⁵¹
227 成就彼法故。示現種種瑞相者、示現彼
228 彼事故。如彼事相現・沒・住・滅、應知。以文

（第十紙）

138 修¹³⁸修¹³⁸【觀】

139 【故】+【觀】

140 【住】+【觀】

141 豪¹⁴¹毫¹⁴¹【觀】

142 【取】+【觀】

143 以¹⁴³已¹⁴³【觀】

144 【者】+【觀】

145 【現】+【觀】

146 【說】+【觀】

147 【字章】+【觀】

148 【何等爲二】+【觀】

149 【故】+【觀】

150 【緣】+【觀】

151 【內】+【觀】

底本は脱字。
「緣」は校合②（二二八頁）の諸本にあり、
底本は脱字。

229 殊師利、能記彼事故。以文殊師利所作成
 230 就、因果成就、現見彼法故。所作成就者、
 231 有二種。一者、功德成就。二者、智惠¹⁵²成就。
 232 曰成就者、一切智成就。
 233 ¹⁵³又曰成就者、衆相具足也。果成就者、說
 234 大法也。¹⁵⁴種種佛國土者、示現彼國土中、
 235 種種差別、應知。淨妙國土者、謂无煩惱
 236 衆生住處故。
 237 如經、照於東方万八千世界、乃至悉見彼
 238 佛國界莊嚴故。如來為上首者、諸菩薩
 239 等、依如來住故。以彼如來、於彼國土、諸
 240 大衆中、得自在故。
 241 如經、又見彼土現在諸佛、如是等故。自
 242 此已下、明聖者。文殊師利菩薩、以宿命
 243 智、現見過去曰相・果相、成就十種事、如
 244 ¹⁵⁶○現在前。是故能答¹⁵⁷協¹⁵⁷勒。現見過去曰相者、
 245 文殊師利自見己身、曾於彼諸佛國
 246 土中、修¹⁵⁸種種行事故。現見過去果相者、
 247 文殊師利自見己身、是過去¹⁵⁹妙光菩薩、

152 惠¹⁵²慧¹⁵²【叡】
 153 【緣】+【叡】
 154 【故】+【叡】
 155 【佛】+【叡】
 156 底本には補入記号の右に「現」とあるが、「如¹⁵⁶現在」
 の形は、校舎②（二三頁）三三頁の諸本に見られな
 い。
 157 【菩薩】+【叡】
 158 修¹⁵⁸修¹⁵⁸【叡】
 159 【世】+【叡】

- 248 於彼佛所、聞此法門、為衆生說故。成就
 249 十種事者、何等為十。一者、現見大此法
 250 門為衆生說故成就十種事者何等十
 251 十者現見太義160曰成就。二者、現見世間（第十一紙）
 252 文字章句甚深意曰成就。三者、現見
 253 希有曰成就。四者、現見勝妙曰成就。五
 254 者、現見受用大曰成就。六者、現見攝取
 255 一切諸佛轉法輪曰成就。七者、現見善堅
 256 實如來轉法輪曰成就。161八者、現見能進
 257 入曰成就。九者、現見憶念曰成就。十者、
 258 現見自身所逕事因成就。大義因成就
 259 者、八句示現、應知。162一、欲論大法。二者、欲雨
 260 大法雨。三者、欲擊大法鼓。四者、欲建大
 261 法幢。163五者、欲燃大法燈。六者、欲吹大法
 262 蠟。164七者、欲不斷大法鼓。八者、欲說大法
 263 義。165此八句、示現如來欲論大法等故。何
 264 者名為八種大義。謂有疑者、為斷疑
 265 故。已斷疑者、增長淳熒、其智身故。167根淳熒
 266 者、為說二種秘密境界。一謂聲聞秘密168

¹⁶⁰ 底本の二四八行目～二四九行目の「此法門為衆生說故成就十種事者何等為十者現見」と重複した衍文であるため、

私に打ち消し線を引いた。また二五〇行目と二五一行目の行間には、小さい字で「此法門為衆生說故成就十種事者」と書かれていたようであるが、擦り消されている。

¹⁶¹ 〔轉〕は校合②（二二五頁～二二六頁）の諸本になし。

¹⁶² 〔者〕+〔觀〕「者」は校合②（二二六頁～二二七頁）の諸本にあり、底本は脱字。

¹⁶³ 幢Ⅱ幢〔觀〕

¹⁶⁴ 蠟Ⅱ蠟〔觀〕

¹⁶⁵ 〔義〕+〔觀〕

¹⁶⁶ 〔欲〕+〔觀〕

¹⁶⁷ 其Ⅱ彼〔觀〕

¹⁶⁸ 〔微〕+〔觀〕

267 境界。二謂菩薩秘密境界。大法鼓者、二
 268 句示現。以遠門¹⁷⁰故。入密境界者、令進取
 269 上上清淨義故。進取¹⁷¹上上清淨義者、
 270 令進取¹⁷²一切種智、得現見故。取一切智
 271 現見者、為一切法、建立名字章句義故。
 272 建立名字章句義者、令人不可說證智、
 273 轉法輪故。現見世間名字章句意甚深
 274 曰成就者、
 275 如經、我於過去諸佛、曾見此瑞、乃至故現
 276 斯瑞故。現¹⁷²有曰成就者、以无量時¹⁷³。不可
 277 稱不可量者、示現過彼阿僧祇劫、不可得
 278 故。復示現五種劫。一者、夜。二者、晝。三者、月。
 279 四者、時。五者、年。示現彼无量无边劫故。
 280 如經、如過去无量无边不可思議阿僧祇劫、
 281 余時有佛。号日月燈明、乃至得阿耨多
 282 羅三藐三菩提、成就一切種智故。現見
 283 ○妙勝¹⁷⁴曰成就者、以諸佛菩薩自受用示現故。
 284 如經、次復有佛、名日月燈明、乃至所可
 285 說法、初中後善故。現見受用大因成就

169 (掖)一觀

170 門二聞【觀】校合②(二二八頁一三九頁)の諸本で

は、「聞」となっており、底本の「門」は誤写。

171 (進)一觀

172 (見)一觀

173 「不可得故不可思議」+【觀】「不可得故不可思議」は、

校合②(三二頁一三三頁)の諸本にあり、底本は脱文。

174 妙勝二勝妙【觀】底本には「勝」の右に倒置符あり。

- 286 者、是時王子受勝妙樂、各捨出家、復彼大
 287 衆、於忖許時、不生疲倦¹⁷⁵心故。
 288 如經、其最後佛、未出家時、乃至佛授記已、
 289 便於中夜、入无餘涅槃故。現見攝取一切
 290 諸佛轉法輪曰成就者、法輪不斷故。
 291 如經、佛滅度後、妙光菩薩持妙法蓮華
 292 經、滿八十小劫、為人演說故。現見善堅實
 293 如來法輪曰成就者、佛說滅度後、无量時¹⁷⁶
 294 說故。
 295 如經、日月燈明佛八子、皆師妙光、乃至皆
 296 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提故。現見
 297 能進入曰成就者、彼諸王子、得大菩提故。¹⁷⁷
 298 如經、是諸王子、乃至皆成佛道故。現見憶
 299 念曰成就者、為他說法、利益他故。¹⁷⁸（第十三紙）
 300 如經、其最後、成佛者、名曰燃燈、乃至尊
 301 重讚嘆故。現見自身所逕事曰成就者、
 302 以自身受勝妙樂故。
 303 如經、弥勒、當知。乃至佛所護念故。汝号
 304 求名者、示現知彼過去事故。復示現得¹⁸⁰

175 倦^レ倦【觀】

176 【說】—【觀】 底本には「說」の右に見せ消し記号が付されてお
 り、「說」となっている。「說」は校合②（二三六

頁）の諸本になく、衍字のため、私に打ち消し線を引いた。

177 【能】—【觀】

178 底本には「他」に擦り消し跡あり。

179 嘆^レ歎【觀】

180 【彼】+【觀】 「彼」は校合②（二三九頁—二四〇頁）の

諸本にあり、底本は脱字。

305 法具足故。
 306 方便品
 307 經曰。余時世尊、入甚深三昧、正念不動、以
 308 如實智觀、從三昧安詳而起。¹⁸¹○告舍利弗、諸
 309 佛智慧、甚深无量。其智慧門、難見・難覺・
 310 難知・難解・難入。如來所證、一切聲聞・辟
 311 支佛等、所不能知。何以故。舍利弗、如來・
 312 應・正遍知、已曾親近供養、无量百千萬
 313 億那由他佛。¹⁸²於諸佛所、盡行諸佛所脩阿
 314 耨多羅三藐三菩提法。舍利弗、如來已於无
 315 量百千萬億那由他劫、勇猛精進、所作成
 316 就、名稱普聞。舍利弗、如來畢竟、成就希
 317 有之法。舍利弗、難解之法、如來能知。舍
 318 利弗、難解法者、諸佛如來、隨宜所說、意趣
 319 難解。一切聲聞・辟支佛等、所不能知。何以
 320 故。舍利弗、諸佛如來、自在說曰成就故。
 321 舍利弗、如來成就種種方便、種種知見、種
 322 種念觀、種種言辭。舍利弗、吾從成佛已來、
 323 於彼彼處、廣演言教、無數方便、引導衆

¹⁸¹ 〔起已〕+〔觀〕 底本には補入記号の右に「起」の字が見え、その更に右には「已」のような字が見えるが、或いは「已」か。

¹⁸² 〔無數諸〕+〔觀〕

¹⁸³ 〔所〕+〔觀〕

¹⁸⁴ 脩 || 修 〔觀〕

- 324 生、於諸著處、令得解脫。舍利弗、如來知見、（第十四紙）
 325 方便到於彼岸。舍利弗、如來知見、廣大深
 326 遠、无鄣・无導、力・无・不共法・根・力・菩提分・禪
 327 之・解脫・三昧・三摩跋提、皆已具足。舍利弗、
 328 諸佛如來、深入无际、成就一切未曾有法。
 329 舍利弗、如來能種種分別、巧說諸法、言辭
 330 柔濡、悅可衆心。止舍利弗。不須復說。舍
 331 利弗、佛所成就、第一希有難解之法。舍
 332 利弗、唯佛與佛法、¹⁸⁶諸佛如來、能知彼法、
 333 究竟實相。舍利弗、唯佛如來、能知一切¹⁸⁷
 334 法。舍利弗、唯佛如來、能說一切法。何尋¹⁸⁸・云
 335 何法・何似法・何相法・何體法、何尋・云何・
 336 何似・何相・何體、如是尋一切法、如來現見、
 337 非不現見。
 338 論曰。自此已下、示現所說法因果相、應知。
 339 余時世尊、入甚深三昧、正舍不動、以如實¹⁸⁹
 340 智觀、從三昧安詳而起。起已告舍利弗者、
 341 示現如來得自在力故。如來入空、¹⁹⁰无能驚
 342 寤故。何故唯告舍利弗、不告餘聲聞等

¹⁸⁵ 「所畏」＋「觀」諸テキスト（興二六二、摩一四中、留四下）には「畏」か「所畏」があるため、底本は「畏」が脱字。

¹⁸⁶ 「説」＋「觀」「説」は諸テキスト（興二六七、摩一四中、留四下）にあり、底本は脱字。

¹⁸⁷ 「能」＋「觀」

¹⁸⁸ 「法」＋「觀」「法」は諸テキスト（興二六九、摩一四中、留四下）にあり、底本は脱字。

¹⁸⁹ 舍リ念「觀」諸テキスト（興二七三、摩一四中、留四下）では、「念」となっており、底本の「舍」は誤写。

¹⁹⁰ 空ニ定「觀」諸テキスト（興二七四、摩一四中、留五上）では、「定」となっており、底本の「空」は誤写。

343 者、隨深智惠、與如來相應故。¹⁹¹ 不告諸菩薩
 344 者、有五種義。一者、為諸聲聞、所應作事
 345 故。二者、為諸聲聞、迴心趣向大菩提故。
 346 三者、護諸聲聞、恐怯弱故。四者、為令餘
 347 人、善思念故。五者、為諸聲聞、不起所作
 348 已辨心故。諸佛智慧甚深无量者、為諸
 349 大衆、生尊重心、畢竟欲聞如來說故。言（第十五紙）
 350 甚深者、顯示二種甚深義、應知。¹⁹⁴ 何等為
 351 二。一者、證甚深。謂諸佛智惠、甚深无
 352 量故。¹⁹⁷ 二者、阿含甚深。謂智惠門、甚深无
 353 量故。言甚深者、是惣相。餘者、是別。證甚深
 354 者、有五種示現。一者、義甚深。謂依何等
 355 義甚深故。二者、實體甚深。三者、內證甚
 356 深。四者、依止甚深。五者、无上甚深。何故甚
 357 深者、謂大菩提故。大菩提者、如來所證
 358 阿耨多羅三藐三菩提故。
 359 又甚深者、一切聲聞・辟支佛等、所不能
 360 知、故名甚深。¹⁹⁹ 言智惠者、謂一切種・一切
 361 智智義故。²⁰⁰

191 惠_レ慧【叡】
 192 （何故）+【叡】
 193 底本には「聲」に擦り消し跡あり。
 194 （之）+【叡】
 195 （如是）+【叡】
 196 惠_レ慧【叡】
 197 （其）+【叡】
 198 惠_レ慧【叡】
 199 惠_レ慧【叡】
 200 （智）+【叡】

362 如經、諸佛智惠、甚深无量。其智惠門、難
 363 見・難覺・難知・難解・難入。一切聲聞・辟
 364 支佛等、所不能知故。說阿含甚深者、示
 365 現有八種。一者、受持讀誦甚深。如經、佛
 366 曾親近供養无量百千万億無數諸佛
 367 故。二者、修行甚深。如經、於諸佛所、盡行
 368 佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故。三者、
 369 果行甚深。如經、舍利弗、如來已於无量百
 370 千億那由他劫、勇猛精進、所作成就故。
 371 四者、增長功德心甚深。如經、名稱普聞
 372 故。五者、快妙事心甚深。如經、舍利弗、如
 373 來畢竟、成就希有法故。六者、无上甚
 374 深。如經、舍利弗、難解之法、如來能知故。
 375 七者、入甚深。入甚深者、名字章句意、難
 376 得故。自在住持、不同外道、說因緣法、名
 377 為甚深。如經、舍利弗、難解法者、諸佛如
 378 來隨宜所說、意趣難解故。八者、不共聲
 379 聞・辟支佛、所作住持甚深。
 380 如經、一切聲聞・辟支佛、所不能知故。如

（第十六紙）

201 惠_レ慧【叡】
 202 惠_レ慧【叡】
 203 難解_レ解難【叡】
 204 供_レ悅【叡】
 205 修_レ脩【叡】
 206 佛_レ諸【叡】「諸」は諸_レキスト（興一九六、摩一四下、
 留五上）にあり、底本は脱字。
 207 （萬）+【叡】
 208 聞_レ門【叡】
 209 （之）+【叡】
 210 （入甚深）+【叡】

381 是說妙法功德已。次說如來法師功德成就、
 382 應知。如經、何以故。舍利弗、諸佛如來、自在
 383 說因成就故。如來成就四種功德故、能度
 384 衆生。何等為四。一者、往成就。如經、舍利弗、
 385 如來成就種種方便故。種種方便者、從
 386 兜率天退、乃至示現入涅槃故。二者、教
 387 化成就。如經、種種知見故。種種知見者、
 388 示現染淨諸回故。種種知見者示現染淨
 389 諸回故三者、功德畢竟成就。如經、種種
 390 念觀故。種種念觀者、以說彼法、成就曰緣、
 391 如法相應故。四者、說成就。如經、種種言辭
 392 故。種種言辭者、以四无尋智、依何等何等
 393 名字章句、随何等何等衆生、能受而為說
 394 故。
 395 復有義。種種方便者、示現外道耶法、如是
 396 如是種種過失故。復示現諸佛正法、如是
 397 如是種種功德故。如經、舍利弗、吾從成佛
 398 已來、廣演言教、无數方便、引導衆生、於
 399 諸著處、令得解脫故。復示現無數方便者、方
 (第十七紙)

211 底本には「種」の右に見せ消し記号が付されており、「種」となっている。衍字であるため、私に打ち消し線を引いた。

212 底本の三八七行目、三八八行目の「種種知見者示現染淨諸回故」と重複した衍文であるため、私に打ち消し線を引いた。

213 (種種方便) + 觀

214 是如 || 如是 觀

215 (故) (觀) 「故」は諸テキスト(興三二八、摩一五上、留五下)になく、衍字と見られるため、私に打ち消し線を引いた。

- 400 便令入諸善法故。復方便者、斷諸疑故。
 401 復方便者、令入增上勝智故。²¹⁶復方便
 402 者、依四攝法、攝取衆生、令得解脫故。諸著
 403 處者、彼處處著。或著諸界、或著諸地、或
 404 著諸分、或著諸示故。²¹⁷著界者、著欲・色・无
 405 色界故。著地者、著戒取三昧。初禪之
 406 地、乃至非非想、及滅盡之地故。著分者、著
 407 在家・出家分故。著在家○者、著已同類、作
 408 種種業・邪見等故。著出家分者、著名
 409 聞利養・種種諸覺・煩惱等故。²¹⁸著我者、²²⁰
 410 著聲聞乘・菩薩乘故。著聲聞乘者、樂
 411 持小乘戒、求湏陀洹・斯陀含・阿那含・阿
 412 羅漢等故。著大乘者、²²¹著利養・供養・恭
 413 敬等。著分別、觀種種法相乃至佛地故。²²²
 414 復種種知見者、自身成就不可思議境界、
 415 與聲聞・菩薩等故。
 416 如經、舍利弗、如來知見、方便到於彼岸故。
 417 到彼岸者、勝餘一切諸菩薩故。
 418 復種種念觀者、如經、舍利弗、如來知見、

216 (中) + 觀
 217 示 || 乘 (興三二二、摩一五上、留五
 下) では、「乗」となっており、底本の「示」は誤写。
 218 (諸) + 觀
 219 (分) + 觀 底本には補入記号の右に「分」とあり。
 220 我 || 乘 (觀) 諸テキスト (興三二六、摩一五上、留五
 下) では、「乗」となっており、底本の「我」は誤写。
 221 (謂) + 觀
 222 (故) + 觀

419 廣大深遠、无郭・无寻力・无畏・不共法・根・
 420 力・菩提分・禪乏・解脫・三昧・三摩跋提、皆
 421 已具足故。
 422 又第一成就、可化衆生、依止善知識、而成
 423 就故。第二成就、根莢衆生、令得解脫故。
 424 第三成就、²²³刀家自在、淨降伏故。第四說成
 425 就者、有七種。一者、種種成就。如經、舍利
 426 弗、諸佛如來、深入无際、成就一切未曾
 427 有法故。二者、言語成就。得五種美妙音聲
 428 說法。如經、如來能種種分別、巧說諸法、言
 429 辭柔濡、悅可衆心故。三者、相成就。如經、止
 430 舍利弗。不²²⁴須復說故。有法器衆生心、已滿
 431 足故。四者、堪成就。所有一切可化衆生、皆知
 432 ○成就。²²⁴希有勝妙功德、能說法故。如經、舍利
 433 弗、佛所成就、第一希有難解之法故。
 434 五者、无量種成就。說不可盡。如經、舍利弗、
 435 唯佛與佛說法、諸佛如來、能知彼法、究竟
 436 實相故。言實相者、謂如來藏。法身之體、
 437 不變義故。六者、覺體成就。如來所說一

224 223

〔得〕+〔觀〕
〔如來〕+〔觀〕

底本には補入記号の右に「如來」とあり。

- 438 切諸法、唯²²⁵如来、自證得故。如經、舍利弗、
 439 唯佛如来、知一切法故。七者、随順衆生
 440 意、為說脩行法成就。彼法何²²⁷尋如²²⁶尋故。
 441 如經、舍利弗、唯佛如来、能說一切法故。
 442 第一、種種法門、攝衆生故。第二、令不散
 443 乱住故。第三、令取故。第四、令得解脫故。
 444 第五、令彼脩行、成就得對治法故。第六、能
 445 令彼脩、進趣成就故。第七、令彼脩行、不退
 446 失故。此七種法、為諸衆生、自身所善成就
 447 故。人與教化令得成就者、與二種法、令彼²³²
 448 成就。何²³³尋為二。一者、與證法。二者、與說法。
 449 一與證法令成就者、謂依證法、而授與故。（第十九紙）
 450 二與說法令成就者、謂依說法、而說與故。此
 451 二種法、如向前說。依此二種法、有何次第、而
 452 得脩行。即彼前文句再說、應知。
 453 又依證法、有五種。一者、何尋法。二者、云何
 454 法。三者、何似法。四者、何相法。五者、何鉢法
 455 故。何尋法者、謂聲聞法・辟支佛法・佛法
 456 故。云何法者、謂起種種諸事說故。何似法

225 (佛) + 觀
 226 脩 || 修 [觀]

227 「是」は諸テキスト（興三五〇、摩一五中、
 留六上）にあり、底本は脱字。

228 「取」 + 觀 「取」は諸テキスト（興三五一、摩一五中、
 留六上）にあり、底本は脱字。

229 脩 || 修行 [觀] 「行」は諸テキスト（興三五三、摩一五
 中、留六上）にあり、底本は脱字。

230 脩 || 修 [觀]
 231 「作」 + 觀 「作」は諸テキスト（興三五五、摩一五中、
 留六上）にあり、底本は脱字。

232 人 || 又 [觀] 諸テキスト（興三五五、摩一五中、留六
 上）では、「又」となっており、底本の「人」は誤写。

233 (者) - 觀
 234 (者) - 觀

235 脩 || 修 [觀]

457 者、依三種門、得清淨故。何相法者、謂三
 458 種義、一相法故。何體法者、无二躰故。无
 459 二躰者、謂无量乘、唯一佛乘、无二三故。
 460 復有義。何等法者、謂有為法・无為法
 461 等。云何法者、謂曰緣法・非曰緣法等。何
 462 似法者、謂常法・无常法、如是等。何相法
 463 者、謂生等三相法・不生等三相法。何
 464 躰法者、謂五陰躰・非五陰躰²³⁶。又何似法者、
 465 謂无常法・有為法・曰緣法。又何相法者、
 466 謂可見相²³⁷等法。又何躰法者、謂五陰能
 467 取・所取。以五陰是苦・集躰故。又五陰者、是
 468 道諦躰故。復有異義。依說法說。何等法
 469 者、謂名・句・字身故²³⁸。云何者、謂依如来所
 470 說法故。何似法者、謂能教化可化衆生故。
 471 何相法者、依音聲取故、以依音聲取彼
 472 法故。何躰法者、謂假名躰、法相義故。自此
 473 已下、依三種義示現。一者、決乏義。二者、疑²⁴⁰
 474 義。三者、依何事疑義。應當善知。決乏
 475 義者、有聲聞、方便證得深法、作決乏

236 〔故〕+〔觀〕
 237 〔相〕+〔觀〕
 238 〔等〕+〔觀〕
 239 〔法〕+〔觀〕 「法」は諸テキスト（興三七三、摩一五下、
 留六中）にあり、底本は脱字。
 240 〔次〕+〔觀〕

476 心。於聲聞道中、得方便涅槃證故。如是
 477 二種證法、示現有為・無為法故。
 478 如經、余時大眾中、有諸聲聞、漏盡阿
 479 羅漢。乃至多得此法、到於涅槃故。疑義
 480 者、謂聲聞・辟支佛、不能知故。是故生疑。
 481 如經、而今不知是義所趣故。依何事疑
 482 義者、聞如來說、聲聞解脫、我解脫不異、
 483 是故生疑。謂生疑著、生曰中疑。此事云
 484 何。云何如來數數說、於甚深境界、前說
 485 甚深、後說甚深、不同聲聞、如是等。是故
 486 生疑。
 487 如經、余時、舍利弗、知四眾心疑、乃至而說
 488 偈言故。自此已下、示現依四種事說。
 489 一者、決乏心。二者、回授記。三者、取授記。
 490 四者、與授記。應知。云何決乏心。已生驚
 491 怖者、令斷驚怖。以為利益二種人故。是
 492 故如來、有決乏心。此驚怖、有五種、應知。
 493 一者、損驚怖。謂小乘眾生、如所聞聲、取
 494 以為實、誇无大乘、而作是言。如來說言、

241 (門) + (觀)
 242 (等有) + (觀)
 243 疑義 || 義疑 (觀)
 244 (與) + (觀)
 245 著 || 者 (觀) 諸テキスト (興三八四、摩一六上、留六
 中) では、「著」となっており、底本の「著」は誤写。
 246 誇 || 誇 (觀) 底本には「誇」の右に見せ消し記号が付
 されており、「誇」となっている。また上方欄外には「證
 無」とあり。

495 阿羅漢果、究竟涅槃。我畢竟取、如是涅
 496 槃。是故羅、不入涅槃。如是驚怖故。²⁴⁷
 497 二者、多事驚怖。謂以大乘衆生、生如是
 498 心。我於無量無邊劫中、行菩薩行、²⁴⁹ 忍受²⁵⁰ 勤
 499 苦。以是念故、生驚怖心。起取異乘心故。
 500 如是驚怖。三者、顛倒驚怖。謂心分別、有
 501 我・我所・種種身、見不善法故。如是驚怖。
 502 四者、心悔驚怖。謂大德舍利弗等、起如
 503 是心言、我不應證²⁵¹ 如是小乘之法。如是
 504 悔已、心即自止。即此悔心、名為驚怖。此
 505 義、應知。五者、誑驚怖。謂增上慢聲聞之
 506 人、作如是心。云何如來、誑於我等。如是
 507 驚怖故。回授記者、
 508 如經、止止舍利弗。不須復說。若說是事、一
 509 切世間諸天・人等、皆生驚怖故。此回授
 510 記、²⁵² 生驚怖者、有三種義。一者、欲令彼
 511 諸大衆、推覓甚深妙境界故。二者、欲
 512 令大衆、生尊重心、畢竟欲聞如來說故。
 513 三者、為令諸增上慢聲聞之人、捨離

247 「漢」は諸テキスト（興三九三、摩一六上、
 留六下）にあり、底本は脱字。
 248 「以」一「觀」
 249 忍久「觀」
 250 勤「觀」
 251 「於」一「觀」
 252 「皆」一「觀」

514 法坐、而起去故。第二請者、示現過去无
515 量諸佛、教化衆生。如經、是會无數、乃至
516 聞佛所說、則能敬信故。第三請者、示現
517 今現在佛、教化衆生。如經、今此會中、如
518 我尋比、乃至長夜安隱、多所饒益故。取
519 受記者、以舍利弗尋、欲得授記。²⁵³
520 如經、佛告舍利弗。汝以殷懃三請。豈得
521 不說。汝今諦聽、如是尋故。與授記者、有
522 六種、應知。一者、未聞令聞。二者、說。三者、
523 依何尋義。四者、令住。五者、依法。六者、遮。
524 未聞令聞者、如經、舍利弗、如是妙法、諸
525 佛如來、時乃說之。如優曇鉢華、如是尋
526 故。說者、如經、舍利弗、我以无數方便、種
527 種回緣、譬喻言辭、演說諸法。如是尋故。^{（第二十二紙）}
528 種種回緣者、所謂三乘。彼三乘者、唯有
529 名字・章句・言說、非有實義。以彼實義、不
530 可說故。依何尋義者、如經、舍利弗、諸佛
531 世尊、唯以一大事回緣故、出現於世。如是
532 尋故。彼一大事者、依四種義、應知。²⁵⁵何尋²⁵⁶

253 〔殷懃〕一〔觀〕
254 〔鉢〕一〔觀〕
255 〔善當〕十〔觀〕
256 尋〓者〔觀〕

551 為四。一者、无上義。唯除如來一切智
 552 智、更无餘事。如經、欲開佛知見、令衆生
 553 知得清淨故、出現於世。佛知見者、如來
 554 能、以實智、知彼義故。二者、同義。以聲
 555 聞・辟支佛・佛法身平等故。如經、欲示衆
 556 生、佛知見故、出現於世。法身平等者、佛
 557 性・法身、更无差別故。三者、不知者、不
 558 知究竟、唯一佛乘故。如經、欲令衆生、
 559 悟佛知見故、出現於世。四者、曰義。為令
 560 證不退轉地。示現欲與无量智業故。
 561 如經、欲令衆生、入佛知見道、出現於世。
 562 示者、為諸菩薩、有疑心者、令知如實脩
 563 「行故。又悟入者、未發菩提心者、令發心
 564 故。已發心者、令入法故。又復悟者、令外
 565 道衆生、坐覺悟故。又復入者、令得聲
 566 聞小乘果者、入大菩提故。令住者、如經、
 567 舍利弗、但以一佛乘故、為衆生說法故。
 568 依法者、如經、舍利弗、過去諸佛、以无量无
 569 數方便、種種譬喻・曰緣・念觀、方便說法。是法

257 佛知見佛【觀】

258 【證】+【觀】「證」は諸テキスト（興四二五、摩一六中、留七上）にあり、底本は脱字。

259 【如】+【觀】「如」は諸テキスト（興四二五、摩一六中、留七上）にあり、底本は脱字。

260 （義以一切聲聞辟支佛等不能知彼真實處故此言不知真實處）+【觀】当該箇所は、諸テキスト（興四二八・四二九、摩一六中、留七上）にも二十一字・二十四字の文字列が確認できるため、底本は脱文している。

261 【欲】+【觀】

262 【欲】+【觀】

263 道【故】+【觀】諸テキスト（興四三〇、摩一六下、留七中）は、「道故」か「故」となっているため、底本は「故」が脱字。

264 【復】+【觀】

265 脩【修】+【觀】

266 【入】+【觀】

267 坐【生】+【觀】諸テキスト（摩一六下、留七中）では、「生」となっており（興四三四・四三五の当該箇所は脱字、底本の「坐」は誤写）。

552 皆為一佛乘故、如是等故。言譬喻者、如依
 553 牛有乳・酪²⁶⁸・生藕・煖藕乃至醍醐²⁷⁰。醍醐為第
 554 一。小乘如乳、大乘如醍醐故。此譬喻、唯明大
 555 乘无上。諸聲聞等、忽同大乘无上義故。
 556 聲聞同者、此中示現諸佛如來法身之
 557 性、同諸凡夫・聲聞・辟支佛等。法身平等、
 558 无差別故。此譬喻、示現曰縁之義。如向所
 559 說。言念觀者、於小乘諦中、人无我等、於
 560 大乘諦中、真如・法界・實際、人无我・法无我
 561 等、種種觀故。²⁷³方便者、²⁷⁴小乘中、觀陰界入、
 562 獸苦離苦、○解得脫故。²⁷⁵於大乘中、諸波羅
 563 蜜、以四攝法、攝取自身他身利益、對治法
 564 故。²⁷⁶者、如經、舍利弗、十方世界中、尚无二乘²⁷⁷。
 565 何況有三。无三乘者、謂无二乘所得涅槃。
 566 唯佛如來、證大菩提、究竟滿足一切
 567 智惠、名大涅槃。非諸聲聞・辟支佛等、
 568 有涅槃法。唯一佛乘故。一佛乘者、依
 569 四種義說、應知。如來依此六種受記。是
 570 故前說、何等法・云何法・何似法・何相法・

268 【故得】+【觀】

269 底本の字は「酪」そのものではないが、それに似た字形。右に見せ消し記号が付されていて「酪」となっている。また土方欄外に「酪^レ」とあり。寛永二年版の当該箇所には「酪」あり。

270 【此五味中】+【觀】

271 【人】+【觀】

272 【法性及】+【觀】

273 【言】+【觀】

274 【於】+【觀】

275 解得^レ得解【觀】 底本には「得」の右に倒置符あり。

276 【遮】+【觀】 「遮」は諸テキスト（興四四九、摩一七上、留七中）にあり、底本は脱字。

277 【如是等故】+【觀】

278 三二二【觀】 諸テキスト（興四五〇、摩一七上、留七中）は、「二」となっており、底本の「三」は誤写。

571 何鉢法、如是示現。何尋法者、謂未曾聞
 572 法。云何法者、謂種種言辭・譬喻說故。
 573 何似法者、唯為一大事故。何相法者、
 574 為隨衆生器、說諸佛法故。何鉢法者、唯
 575 一乘鉢故。一乘鉢者、謂諸佛如來、平尋
 576 法身。彼諸聲聞・辟支佛乘、非彼平尋法身
 577 之鉢。以目・果・行・觀、不同故。自此已下、如來
 578 說法、為斷四種疑、應知。何尋四種。一者、何
 579 時說。二者、云何知是增上慢人。三者、云何
 580 堪說。四者、云何如來、不成妄語。何時說
 581 者、諸佛如來、於何尋時、發起種種方便（第二十四紙）
 582 說法。為斷彼疑。
 583 如經、佛告、舍利弗、諸佛出於五濁惡世。所²⁷⁹
 584 劫濁等故。云何知是增上慢者、如來不
 585 為、增上慢人說法。云何知彼、是增上
 586 慢。為斷彼疑故。如經、若有比丘、實得阿
 587 羅漢者、若信此法、无有是處等故。云何²⁸²
 588 堪說者、從佛聞法、而起謗心。云何如
 589 來、不成不堪說法人。為斷此疑。如經、

279 所^レ謂【觀】諸テキスト（興四六四、摩一七上、留七
 下）は、「所謂」か「謂」になっているため、底本は「謂」
 が脱字。
 280 (而) + 【觀】
 281 (諸) + 【觀】
 282 (不) + 【觀】「不」は諸テキスト（興四六七、摩一七上、
 留七下）にあり、底本は脱字。
 283 (如是) + 【觀】

590 除佛滅度後、現前无佛。如是尋故。云
 591 何如來不成妄語者、此以如來、先說法
 592 異、今說法異、云何如來、不成妄語。為斷
 593 此疑。如經、舍利弗、汝等、當一心信解、
 594 受持佛語。諸佛如來、言无虚妄。无有餘
 595 乘、唯一佛乘故。乃至童子戲、聚沙為佛
 596 塔。如是諸人等、皆以成佛道者、謂發菩
 597 提心、行菩薩行者、所作善根、能證菩提。
 598 非諸凡夫及决乏聲聞、本來未敬菩提
 599 心者、之能得故。如是乃至少伍頭等、皆
 600 念如是。尊者舍利弗、說偈言。
 601 金色三十二 十力諸解脫 同共一法中 而不得此事
 602 八十種妙好 十八不共法 如是尋功德 而我皆以失。
 603 論曰。此偈、示現何義。舍利弗、自号噴身言、
 604 我不見諸佛、不往佛所、及不聞佛說法、不
 605 供養恭敬諸佛、无利益衆生事、於未得法
 606 退是故。舍利弗、依如是等、号噴自身。不見
 607 佛者、示現不見、諸佛如來大人之相。不生
 608 恭敬供養心故。不往佛所者、示現教化（第二十五紙）

284 行二道【觀】

285 【所】+【觀】 「所」は諸テキスト（興四七七、摩一七中、留八上）にあり、底本は脱字。

286 伍貳貳【觀】

287 【譬喻品】+【觀】

288 等二諸【觀】

289 以二已【觀】

290 【諸】+【觀】

291 依二作【觀】 当該箇所について、諸テキスト（興四八四、摩一七中、留八上）では、「作如是等」或いは「作如是言」があるか、全くないかで分かれるが、底本の「依如是等」は「依」が誤写か。

292 噴二責【觀】

293 【諸】+【觀】

609 衆生力者。²⁹⁴放金色光明者、示現見佛自
 610 身異身、獲得无量諸功德故。聞說法者、示
 611 現能作、利益一切衆生故。力者、示現衆生
 612 有疑、依十力斷疑故。供養者、示現能教
 613 化衆生力故。十八不共法者、示現遠離諸
 614 鄣導故。恭敬者、示現出生无量福德、依如
 615 來教、得解脫故。以人无我・法无我、一切
 616 諸法、悉平等故。是故舍利弗、自号噴身
 617 言、我未得如是法。於未得中退故。自此已
 618 下、²⁹⁷為七種具足煩惱²⁹⁸染性衆生、說七種
 619 譬喻、對治七種增上慢心。此義應知。
 620 又三種染慢、无煩惱人三昧・解脫・見等染慢、
 621 對治此故、說三種平等。此義應知。何者七
 622 種○煩惱性人。一者、求勢力人。二者、求聲
 623 聞解脫人。三者、大乘人。³⁰¹四者、有乏人。五者、
 624 乏人。六者、集功德人。七者、不集功德人。何
 625 等七種增上慢心。云何七種譬喻對治。
 626 一者、顛倒求諸功德增上慢心。³⁰³謂世間中、
 627 諸煩惱染、熾燃增上、而求天人勝妙境

294 者「故」〔觀〕諸テキスト（興四八六、摩一七中、留八上）では、「故」となっており、底本の「者」は誤写。

295 〔見〕〔觀〕

296 〔及〕〔觀〕

297 〔次〕〔觀〕

298 〔豆〕〔觀〕底本には「豆」の右に「悞歟」とあり。諸テキスト（興四九四、摩一七中、留八上）にもなく、衍字であるため、私に打ち消し線を引いた。

299 〔復次爲〕〔觀〕

300 〔具足〕〔觀〕底本には補入記号の右に「具足」とあり。

301 〔求〕〔觀〕

302 〔無〕〔觀〕「無」は諸テキスト（興四九八、摩一七中、留八中）にあり、底本は脱字。

303 〔以〕〔觀〕

- 628 界有漏果報。³⁰⁴ 對治此故、為說火宅譬喻、應
 629 知。二者、聲聞人一向決乏增上慢心。自言
 630 我乘與如來乘等无老別。如是倒取。對
 631 治此故、為說窮子譬喻、應知。三者、大乘
 632 人一向決乏增上慢心。起如人意、无別
 633 聲聞・辟支佛乘。如是倒取。對治此故、為
 634 說雲雨譬喻、應知。四者、實³⁰⁵无謂有增上慢
 635 心。以有世間有漏三昧三摩跋提、實无³⁰⁶（第二十六紙）
 636 涅槃、而生涅槃相。³⁰⁷ 如是倒取。對治此故、為
 637 說化城譬喻、應知。五者、散乱增上慢心。實³⁰⁸
 638 无有乏、過去雅³⁰⁸有大乘善根、而不覺知³⁰⁹
 639 故。不求大乘、於狭劣心中、生虚妄解、謂³¹⁰
 640 第一乘。如是倒取。對治此故、為說繫寶珠
 641 譬喻、應知。六者、實有功德增上慢心。聞說³¹¹
 642 大乘法、取非大乘。如是是³¹²倒取。對治此
 643 故、為說王解髻中明珠與之譬喻、應知。³¹³
 644 七者、實无功德增上慢心。於第一乘、不
 645 曾脩集諸善根故、聞說第一乘、心中不
 646 取、以為第一。如是倒取。對治此故、為說

304 〔如是倒取〕+〔觀〕

305 〔而〕+〔觀〕

306 心〓已〔觀〕

307 相〓想〔觀〕

308 雅〓雖〔觀〕

309 留八中〕では、「雖」となっており、底本の「雅」は誤写。

310 〔不覺知〕+〔觀〕

311 〔以為〕+〔觀〕

312 〔而〕+〔觀〕

313 〔是〕+〔觀〕

314 〔是〕+〔觀〕

315 〔是〕+〔觀〕

316 〔是〕+〔觀〕

317 〔是〕+〔觀〕

318 〔是〕+〔觀〕

319 〔是〕+〔觀〕

320 〔是〕+〔觀〕

321 〔是〕+〔觀〕

322 〔是〕+〔觀〕

323 〔是〕+〔觀〕

324 〔是〕+〔觀〕

325 〔是〕+〔觀〕

326 〔是〕+〔觀〕

327 〔是〕+〔觀〕

328 〔是〕+〔觀〕

329 〔是〕+〔觀〕

330 〔是〕+〔觀〕

331 〔是〕+〔觀〕

332 〔是〕+〔觀〕

333 〔是〕+〔觀〕

334 〔是〕+〔觀〕

335 〔是〕+〔觀〕

336 〔是〕+〔觀〕

337 〔是〕+〔觀〕

338 〔是〕+〔觀〕

647 醫師譬喻、應知。
 648 第一人者、示世間中種種善根、三昧功德、
 649 方便令喜、然後、令入大涅槃故。第二人者、
 650 以三為一、令入大乘故。第三人者、令知種
 651 種乘。³¹⁴諸佛如來、平等說法、隨諸衆生善根
 652 種子、³¹⁵生牙故。第四人者、方便令入涅槃
 653 城故。涅槃城者、所謂諸禪・三昧城。³¹⁷過彼
 654 城已、然後、令入大涅槃城故。第五人者、
 655 示其過去所有善根、令憶念已、然後、教
 656 令入三昧故。第六人者、說大乘法、以此法門、
 657 同十地行滿、諸佛如來、密與授記故。第七
 658 人者、根未焚者、³¹⁸為令焚故、如是示現得
 659 涅槃量。為是義故、如來說此七種譬喻。何
 660 者名三種³¹⁹無煩惱人三種染慢。所謂三種
 661 顛信故。何等為三。一者、信種種乘異。二者、
 662 信世間涅槃異。三者、信彼此身異。為對治（第二十七紙）
 663 此三種染慢故、說三種平等、³²¹應知。何者名為
 664 三種平等。云何對治。一者、乘平等。謂與聲
 665 聞、授菩提記。唯有大乘、無二乘故。是乘

314 〔異〕＋〔觀〕
 315 〔而〕＋〔觀〕
 316 〔佛〕＋〔觀〕
 317 〔故〕＋〔觀〕
 318 焚者＝純熟
 319 〔名〕＝〔觀〕 諸テキスト（興五二七、摩一八上、留八下）には、「名」がなく、底本は衍字か。
 320 〔倒〕＋〔觀〕 「倒」は諸テキスト（興五二七、摩一八上、留八下）にあり、底本は脱字。
 321 〔此義〕＋〔觀〕

666 平等、无耆别故。二者、世間涅槃平等。以
 667 多寶如来入於涅槃、世間彼此平等、无
 668 耆别故。三者、身平等。多寶如来、已入涅槃、
 669 示現身。自身化身、法身平等、无耆别
 670 故。如是三種无煩惱人、潦慢之心、見彼此
 671 身所作耆别、以不知彼此佛性・法身悉平
 672 等故。即謂彼人、我證此法、彼人不得此。
 673 對治此故、與諸聲聞授記、應知。彼聲聞
 674 等、為實成佛故、與授記。為不成佛、與授記
 675 耶。若實成佛者、菩薩何故於无量劫、修集
 676 无量種種功德。若不成佛者、云何虚妄與
 677 之授記。彼聲聞等、得授記者、得決之心。非
 678 謂聲聞成就法性故。如来依三種平等、說
 679 一乘法故。以如来法身與彼聲聞法身、
 680 平等无異、故與授記。非即具足修行功德
 681 故。是故菩薩功德具足、諸聲聞人功德未
 682 具足。言授記者、有六處示現。五是、如来記。
 683 一者、菩薩記。如来記者、謂舍利弗・摩訶迦
 684 葉等、衆所知識。名号不同故、與別記。富樓

322 「涅槃」+「觀」 「涅槃」は諸テキスト（興五三三、摩一
 八上、留八下）にあり、底本は脱字。

323 「法」+「觀」

324 「復」+「觀」 「復」は諸テキスト（興五三四、摩一八上、
 留八下）にあり、底本は脱字。

325 化〓他「觀」 諸テキスト（興五三四、摩一八上、留八
 下）では、「他」となっており、底本の「化」は誤写。

326 「此」+「觀」

327 「問曰」+「觀」

328 「答曰」+「觀」

329 「彼」+「觀」

330 「人」+「觀」

331 「故」+「觀」

685 那等五百人、千二百人等、同一名故、俱時
 686 與記。學无學等、俱同一号。又復非衆所³³²
 687 知識故、一時與記。與提婆達多記者、示現
 688 如來无怨惡故。與比丘尼及諸天女記者、示
 689 現女人・在家・出家、修菩薩行者、皆衍者
 690 皆證佛果故。菩薩授記者、如不輕菩薩品³³³
 691 示現、應知。礼拜讚嘆言、我不輕汝。汝等皆³³⁴
 692 當作佛者、示諸衆生、皆有佛性故。言聲聞
 693 授記者、聲聞有四種。一者、決乏聲聞。二者、
 694 增上慢聲聞。三者、退菩提心聲聞。四者、應
 695 化聲聞。二種聲聞、如來與授記。謂應化
 696 聲聞・退已還教菩提心者。決乏・增上慢二
 697 種聲聞、根未焚故、如來不與授記、菩薩與
 698 授記。菩薩與授記者、方便令教菩提心故。³³⁶
 699 又依何義故、如來說三乘名為一乘。依同
 700 義故、與諸聲聞大菩提記。同義者、以如³³⁷
 701 來法身・聲聞法身平等、无差別故。以諸
 702 聲聞・辟支佛、異乘故、有老別。以彼二乘、
 703 非大乘故。如來說言、不離我身、是无上義。

332 (是) + 〔觀〕

333 〔行者皆〕〔觀〕 当該箇所は、諸テキストでは、「行者皆」

(留九上) か「行者皆」(興五五〇・摩一八七) となつており、底本のように「行者皆行者皆」とはなっていないため、「行者皆」を衍字と見做して、私に打ち消し線を引いた。

334 嘆〓歎作如是〔觀〕

335 当該箇所は、拙稿「二〇三・B」では「汝亦等皆」と翻刻しているが、「等」は誤植(衍字)であり、「汝亦皆」に翻刻するのが正しい。「亦」は、興聖寺本に見られる「等」の略字。ここに訂正して、お詫び申し上げます。

336 (與) + 〔觀〕

337 (言) + 〔觀〕

338 (彼此) + 〔觀〕

339 (等) + 〔觀〕

704 一切聲聞・辟支佛二乘、法中不說此義。
705 以其不能如實解故。以是義故、諸菩薩
706 等、行菩薩行、非為虛妄。无上義者、自餘殘
707 脩多羅、明无上義。³⁴⁰有十種、應知。一者、示現
708 種子无上故、說雲雨譬喻。汝等所行、是菩
709 薩道者、謂發菩提心退已還發、先所脩行、³⁴¹
710 善根不減、同後得果故。二者、示現脩行无
711 上故、說大通智勝如來本事等。³⁴²三者、示
712 現增長力无上故、說商主譬喻。四者、示現
713 令鮮无上故、說繫寶珠譬喻。五者、示現清
714 淨國土无上故、示現多寶如來塔。六者、示
715 現无上故、說髻中明珠譬喻。七者、示現教
716 化衆生无上故、地中踊出无量菩薩摩³⁴³（第二十九紙）
717 訶薩等故。八者、示現成大菩提无上故、
718 示現三種佛菩提。一者、應化佛菩提。隨
719 所應見、而為示現故。如經、皆謂如來、出
720 釋氏宮、去伽耶城不遠、坐於道場、得阿耨
721 多羅三藐三菩提故。二者、報佛菩提。十地
722 行滿足、得常涅槃證故。如經、善男子、我

340 脩ニ脩【叢】
341 〔無上義者〕＋【叢】
342 先ニ者前【叢】
343 脩ニ脩【叢】
344 脩ニ脩【叢】
345 〔故〕＋【叢】
346 〔說〕＋【叢】〔說〕は諸テキスト（興五七一、摩一八中、
留九中）にあり、底本は脱字。
347 〔解〕＋【叢】
348 踊ニ涌【叢】

723 實成佛以來、无量无边百千万億那由他
 724 劫故。三者、法佛菩提。謂如來藏性淨、涅
 725 槃常恒、清涼不變故。³⁴⁹
 726 如經、如來如實知見三界之相、乃至不如
 727 三界見於三界故。三界相者、謂衆生界即
 728 涅槃界。不離衆生界、有如來藏故。无有
 729 生死若退若出者、謂常恒清淨不變義
 730 故。无在世及滅度者、謂如來藏真如
 731 之牀、不即衆生界、不離衆生界故。非實
 732 非虛非如非異者、謂離四種相。有四種相³⁵⁰
 733 者、是无常故。不如三界見於三界者、謂諸³⁵¹
 734 如來、能見能證、真如法身。凡夫不見故。是
 735 故、經言、如來明見、无鏐故。³⁵¹我本行菩薩
 736 道今猶未滿者、以本願故。衆生界未盡、願
 737 非究竟。故言未滿。³⁵²非謂菩提不滿乏故。
 738 所成壽命復倍上數者、此文、示現如來
 739 常命、³⁵³功方便、顯多數、過上數量、不可數
 740 知故。我淨土不毀而衆見燒盡者、報佛
 741 如來、真實淨土、第一義諦之所攝故。九

349 〔義〕＋〔數〕
 350 〔謂諸〕＋〔數〕
 351 鐸Ⅱ有錯謬〔數〕 諸テキストでは、「有錯謬」摩一九
 上、留九中）か「錯謬」（興五八七、摩一九注）となっ
 ており、底本の「謬」は誤写。
 352 〔者〕＋〔數〕
 353 功Ⅱ善巧〔數〕

742 者、示現涅槃无上故、説醫師譬喻。十者、
743 示現勝妙力无上故、自餘殘脩多羅説（第三十紙）
744 示現、應知。多寶如來塔、顯示一切佛土清
745 淨者、示現諸佛實相境界中、種種衆寶
746 間錯莊嚴故。示現有八種。一者、塔。二者、量。
747 三者、略。四者、住持。五者、示現无量佛。六者、
748 離穢。七者、多寶。八者、同一塔坐。塔者、
749 示現如來舍利住持故。量者、方便示現
750 一切佛土清淨莊嚴。是出世間、无漏善³⁵⁵
751 根所生。非世間有漏善根之所生故。略³⁵⁷
752 者、多寶如來身、一體示現攝取一切佛³⁵⁸
753 法身故。住持者、示現諸佛如來法身自在
754 身力故。示現无量佛者、示現彼此所作諸
755 業无差別故。遠離穢不淨者、示現一切
756 諸佛國土、平等清淨故。言多寶者、示現³⁵⁹
757 一切佛土同寶性故。同一塔坐者、示現
758 化佛・法身・報佛等、皆為成大事故。自
759 此已下、示現法力・持力・修力、應知。
760 法力者、五種門示現。一者、證。³⁶⁰二者、信。³⁶¹三

354 脩ニ修【叡】

355 主ニ國土【叡】諸テキストでは、「國土」（興五九九、
摩一九上）か「土」（留九下）となっており、底本の「主」
は誤写。

356 （清淨）+【叡】

357 （是）+【叡】

358 佛ニ諸佛眞【叡】

359 （諸）+【叡】

360 （門）+【叡】

361 （門）+【叡】

761 者、供養³⁶²。四者、聞法³⁶³。五、讀誦持說門³⁶⁵。施
 762 勒品中示現。一法門、常精進菩薩品中示
 763 現。施勒品中四種門者、一是證門。如經、
 764 我說是如來壽命長遠時、六百八十万
 765 億那由他恒河沙衆生、得无生法忍故。
 766 此言无生法忍者、謂初地證智、應知。八生
 767 乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者、
 768 謂證初地菩提故。八生一生者、謂諸凡夫、
 769 決乏能證初地。隨力隨分、八生乃至一生、
 770 證初地故。言阿耨多羅三藐三菩提者、以（第三十一紙）
 771 離三界中分段生死、隨分能見真如佛
 772 性、名得菩提。非謂究竟滿乏如來方便
 773 涅³⁶⁸。故。二是信門³⁶⁹。如、復有八世界微塵數
 774 衆生、皆阿耨多羅三藐三菩提³⁷²。故。三供
 775 養門。如經、是諸菩薩摩訶薩、得大法力
 776 時、於虛空中、雨曼陀羅華³⁷³、如是等故。
 777 四〇聞法門。如隨喜品說、應知。一法門常精
 778 進菩薩品示現者、謂讀誦・解說・書寫等、
 779 得六根清淨故。如經、〇善男子・善女人、受持³⁷⁵

七寺一切經本『妙法蓮華經優婆塞持』解題・翻刻（淺野）

362 〔門〕＋〔觀〕
 363 〔門〕＋〔觀〕
 364 〔者〕＋〔觀〕
 365 〔四種法門〕＋〔觀〕
 366 〔法〕＋〔觀〕
 367 〔乃〕＋〔觀〕
 368 〔樂〕＋〔觀〕 底本の上方欄外に「樂^繁」とあり。
 369 〔者〕＋〔觀〕
 370 〔經〕＋〔觀〕 「經」は諸テキスト（興六一八、摩一九中、留一〇上）にあり、底本は脱字。
 371 〔發〕＋〔觀〕 諸テキストには、「發」（摩一九中、留一〇上）か「起」（興六一九）があり、底本は脱字。
 372 〔心〕＋〔觀〕 底本には補入記号の右に「心」とあり。
 373 華^華花^花〔觀〕
 374 底本には補入記号の右に「者」とあり。寛永二年版の当該箇所には「者」なし。
 375 〔若〕＋〔觀〕 底本には補入記号の右に「若」とあり。

- 780 法華經、若讀、若誦、若解說、若書寫、是人
 781 當得八百眼功德、乃至千二百意功德
 782 故。此得六根清淨者、謂凡夫人以經力故、
 783 得勝根用。未入初地菩薩位、應知。³⁷⁶
 784 如經、○父母所生清淨肉眼、見於三千大
 785 千世界如是等故。³⁷⁸
 786 又六根清淨、於一根中、悉能具足、見色・
 787 聞聲・³⁸⁰ 觸・³⁸¹ 別味・覺觸・知法等。諸根互用、
 788 應知。眼所見者、聞香能知。如經、釋提桓
 789 曰、在勝殿上、五欲娛樂、乃至說法故。聞香
 790 知者、此是知境、以鼻根知故。持力者、有
 791 種法門示現。如法師品・安樂行品・勸持品³⁸²
 792 等、廣說。³⁸³ 力、如經、應知。其心決乏、知水必
 793 近者、受持此經、得佛性水、成阿耨多羅
 794 三藐三菩提故。³⁸⁴
 795 脩行力者、有五門示現。一者、說力。二者、行
 796 苦行力。三者、護衆生諸難力。四者、功德
 797 勝力。五者、護法力。說力者、有三種法（第三十二紙）
 798 門、神力品中示現。一者、出廣長舌者、³⁸⁵

376 〔正〕+〔觀〕
 377 〔此義〕+〔觀〕

378 〔以〕+〔觀〕 底本には補入記号の右に「以」とあり。

379 〔者〕+〔觀〕 「者」は諸テキスト（興六二八、摩一九中、

留一〇上）にあり、底本は脱字。

380 瓣³⁸⁰辨³⁸¹〔觀〕

381 〔此義〕+〔觀〕

382 〔三〕+〔觀〕 「三」は諸テキスト（興六三二、摩一九中、

留一〇上）にあり、底本は脱字。

383 〔法〕+〔觀〕 「法」は諸テキスト（興六三三、摩一九中、

留一〇上）にあり、底本は脱字。

384 〔有〕+〔觀〕

385 〔者〕+〔觀〕

799 令憶念故。二者、嚙³⁸⁶咳聲者、說偈令聞
 800 故。聲聞已、如實脩行、不放逸故。三者、彈³⁸⁸
 801 指覺悟衆生者、令修行者、得覺悟故。
 802 行苦行力者、藥王菩薩品示現。教化衆
 803 生故。
 804 又行苦行力者、妙音菩薩品示現。教化
 805 衆生故。護衆生諸難力者、觀世音品・
 806 陀羅尼品示現。功德勝妙力者、妙莊嚴³⁹²
 807 品示現。依過去功德、彼二童子、有如是
 808 力故。護法力者、普賢品³⁹³、及後品³⁹⁴及示
 809 現。
 810 又說言受持觀世音菩薩名、及六十³⁹⁵
 811 二億恒河沙諸佛名、彼福德³⁹⁶平等者、
 812 有二種義。一者、信力故。二者、畢竟知
 813 故。信力者、有二種。一者、求我身如觀
 814 世音自在無異、畢竟信故。二者、謂於彼³⁹⁹
 815 生恭敬心、如彼功德、我念如是、畢竟得
 816 故。畢竟知者、決乏知法界故。言法界
 817 者、名為法性。彼法性者、名為一切諸

386 者嚙¹ 磬² 〔觀〕
 387 聲聞³ 令聞聲⁴ 〔觀〕
 388 〔者〕⁵ 〔觀〕
 389 〔令〕⁶ 〔觀〕
 390 〔菩薩〕⁷ 〔觀〕
 391 〔妙〕⁸ 〔觀〕 底本の「妙」には、その字の上から見せ消
 ちの斜線が引かれている（翻刻では打ち消し線で示した）。
 諸テキスト（興六三六、摩一九中、留一〇上）には「妙」
 なし。
 392 〔王〕⁹ 〔觀〕 「王」は諸テキスト（興六四四、摩一九下、
 留一〇中）にあり、底本は脱字。
 393 〔菩薩〕¹⁰ 〔觀〕
 394 〔及〕¹¹ 〔觀〕 諸テキストでは、当該箇所が「品中示現」
 （興六四六、摩一九下）か「品示現」（留一〇中）となつて
 いるため、「品及示現」とある底本の「及」は誤写か衍字。
 395 〔受持〕¹² 〔觀〕 「受持」は諸テキスト（興六四七、摩一
 九下、留一〇中）にあり、底本は脱字。
 396 〔等〕¹³ 〔觀〕
 397 〔號〕¹⁴ 〔觀〕
 398 福¹⁵ 功¹⁶ 〔觀〕
 399 〔力〕¹⁷ 〔觀〕
 400 〔者〕¹⁸ 〔觀〕
 401 〔謂能〕¹⁹ 〔觀〕

- 818 佛・菩薩平等法身故。平等法身者、○真⁴⁰²
819 如法身、称地菩薩、能證能入。是故受持⁴⁰³
820 六十二億恒河沙等諸佛名号、受持⁴⁰⁴
821 觀世音名号、功德无差別。第一序品、
822 示現七種功德成就。第二方便品、有五⁴⁰⁵
823 分示現、破二明一。餘品、如向處分。易⁴⁰⁶
824 解。（第三十三紙）
825 （一行余白）
826 妙法蓮華經優婆提舍一卷⁴⁰⁶
827 （二行余白）
828 一交了 永藝

402 【謂】+【觀】 底本には補入記号の右に「謂」とあり。

403 【乃】+【觀】

404 【所得】+【觀】

405 向||前【觀】

406 優婆提舍一卷||論【觀】

参考文献

- 會谷佳光『大正新脩大藏經』の底本と校本―卷末「略符」・『大正新脩大藏經勘同目録』・脚注の分析を通して―『東洋文庫リポジトリ』ERNEST 二〇二〇年
- 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 別編 文化財4 典籍』二〇一五年
- 青木佳伶『注大般涅槃經』卷二翻刻（『仙石山仏教学論集』第十一号、二〇一九年、一頁～四六頁）
- 赤尾栄慶「古寫經史から見た七寺一切經―書誌學的アプローチを中心に―」（『中國撰述經典 其之五・撰述書』七寺古逸經典研究叢書 第五卷、大東出版社、二〇〇〇年、七八九頁～八一〇頁）
- 伊久間洋光「七寺一切經における二種の不入藏『密迹金剛力士經』について」（『日本古寫經研究所研究紀要』第五号、二〇二〇年、一頁～一四頁）
- 伊藤瑞叡『法華論』より見たる『十地經論』の性格について―『法華論』の作者・訳者をも論明する―（『宮崎英修先生古稀記念論文集 日蓮教團の諸問題』平楽寺書店、一九八三年、一一九三頁～一二二八頁）
- 上杉智英「七寺藏一切經本『集諸經禮懺儀』卷下 解題」（『集諸經禮懺儀 卷下』日本古寫經善本叢刊第四輯、二〇一〇年、七〇頁～七六頁）
- 上杉智英「七寺藏一切經本『集諸經禮懺儀』卷下 影印・翻刻」（『集諸經禮懺儀 卷下』日本古寫經善本叢刊第四輯、二〇一〇年、七八頁～一二七頁）
- 大竹晋『新国訳大藏經 法華經論・無量寿經論他』大蔵出版、二〇一一年、九九頁～二八〇頁
- 奥野光賢「三論宗関係文献の本文問題」（『駒澤大學佛教學部研究紀要』第七十八号、二〇二〇年、一三頁～二七頁）
- OCHIAI Toshinori, *The Manuscripts of Nanatsu-dera*, Italian School of East Asian Studies Occasional Papers 3, 1991, Kyoto
- 落合俊典「七寺一切經と古逸經典」（『中國撰述經典 其之一』七寺古逸經典研究叢書 第一卷、大東出版社、一九九四年、四七寺一切經本『妙法蓮華經優婆提舍』解題・翻刻（浅野）

七寺一切経本『妙法蓮華経優婆提舍』解題・翻刻（浅野）

七

三三頁～四七七頁）

落合俊典「二種の『馬鳴菩薩傳』——その成立と流傳——」（『中国撰述經典 其之五・撰述書』七寺古逸經典研究叢書 第五卷、

大東出版社、二〇〇〇年、六一九頁～六四六頁）

落合俊典「日本古写経『金剛場陀羅尼経』（国宝本・五月一日経本・七寺一切経本・興聖寺一切経本）について」（『国宝金

剛場陀羅尼経』日本古写経善本叢刊第十一輯、二〇二四年、一三九頁～一四八頁）

神田大輝「広蔵院日辰の『法華論』受容について」（『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号、二〇二二年、五二一頁～五二

六頁）

金天鶴「金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華経論子注』について」（『印度学仏教学研究』第六十卷第二号、一五四頁～一六一頁）

金天鶴『法華経論子注』写本の流通と思想」（『身延論叢』第二十五号《特集 円弘と妙法蓮華経論子注》、二〇二〇年、一

頁～三二頁）

金炳坤「流布本『妙法蓮華経優婆提舍』考」（『宗教研究』第九十卷別冊、二〇一七年、三〇六頁～三〇七頁）

金炳坤「世親『法華論』の流伝に関する諸問題——見直されるべきテキストを中心として——」（『妙法蓮華経優婆提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、二〇二〇年A、一頁～一六頁）

金炳坤「流支訳『法華論』の流布本について——序品を中心として——」（『妙法蓮華経優婆提舍の文献学的研究』法華経研究叢

書Ⅱ、二〇二〇年B、一七頁～一三一頁）

金炳坤「〈資料〉『法華論』諸本校合（二）」（『妙法蓮華経優婆提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、二〇二〇年C、一

五三頁～二四〇頁）

金炳坤「『法華論』諸本校合（三ノ二）」（『身延山大学仏教学部紀要』第二十三号、二〇二二年A、一五頁～四〇頁）

金炳坤「『法華論』諸本校合（三ノ三）」（『日蓮教学研究所紀要』第五十号、二〇二三年、一二九頁～一四四頁）

金炳坤『法華論』諸本校合(三ノ四)、『日蓮學』第六号、二〇二二年B、七一頁〜九七頁)

金炳坤「妙法蓮華經優婆塞の文献学的研究―流支訳より見たる法華論の変遷について―」(龍谷大学世界仏教研究センタ

ー 真宗聖教の文献学的研究―世親『無量寿経論』をモデルケースとして―公開研究セミナーレジュメ集成、二〇二四年、五三頁〜六〇頁)

黒板勝美編『真福寺善本目録』続編、一九三六年

桑名法晃『法華論』版本の研究―清水梁山国訳『法華論』の底本を視点として―(『東洋文化研究所所報』第二十号、二

〇一六年、一七頁〜六二頁)

桑名法晃「清水梁山国訳『法華論』の底本について―版本『法華論』の流布と受容を視点として―」(『妙法蓮華經優婆塞の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、二〇二〇年、二二頁〜六七頁)

黄永武博士主編『敦煌寶藏』第二〇冊、新文豐出版公司、一九八一年

国際仏教学大学院大学・日本古写経研究所編『日本現存八種一切経対照目録』改訂版、二〇二二年

斉藤達也「七寺一切経本『續高僧傳』卷四 解題・影印」(『續高僧傳 卷四 卷六』日本古寫經善本叢刊第八輯、二〇一四年、七三頁〜一〇〇頁)

塩田義遜「法華論の研究」(『棲神』第二十八号、一九四三年、一頁〜四八頁)

清水梁山「国訳法華論開題」「国訳大蔵経 論部五」国民文庫刊行会、一九三二年

清水梁山「国訳妙法蓮華經優婆塞」(『国訳大蔵経 論部五』国民文庫刊行会、一九三二年)

末光愛正「古藏の法華論引用に於ける問題」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第十五号、一九八三年、一〇三頁〜一二三頁)

竺沙雅章『宋元佛教文化史研究』汲古書院、二〇〇〇年

張美僑「菩提流志訳『須摩提経』の流传と入蔵―七寺一切経本を中心として―」(『印度学仏教学研究』第六十九卷第一号、七寺一切経本『妙法蓮華經優婆塞』解題・翻刻(浅野)

七寺一切経本『妙法蓮華経優婆提舍』解題・翻刻（浅野）

八〇

二〇二〇年、二七二頁～二六九頁）

中純夫「應縣木塔所出『契丹藏經』と房山石經遼金刻經」（『中國佛教石經の研究』京都大学學術出版会、一九九六年、一九

三頁～二三九頁）

七寺一切経保存会編『尾張史料 七寺一切経目録』一九六八年

日本古写経研究所編「七寺一切経書誌情報」一覧（一）―飯五函―／（二）―飯二十一函―／（三）―飯十五函―／（四）

―飯十七函―／（五）―大阪市立美術館寄託分―／（六）―飯十一函―」（『日本古写経研究所研究紀要』第四号、二〇一

九年、八一頁～一四四頁、第五号、二〇二〇年、八五頁～一五一頁、第六号、二〇二一年、八七頁～一四一頁、第七号、

二〇二二年、八三頁～一四八頁、第八号、二〇二三年、七一頁～一二二頁、第九号、二〇二四年、九一頁～一六四頁）

野沢佳美『印刷漢文大藏経の歴史―中国・高麗篇―』シリーズ・アタラクシア 3、二〇一五年

野村卓美『清浄法行経』の研究―七寺本『清浄法行経』の「翻刻」と「訓読」をめぐって―」（『文藝論叢』第八十七号、

二〇一六年、一頁～一五頁）

藤井教公・池邊宏昭ほか「世親『法華論』訳注（一）」（『北海道大学文学研究科紀要』第一〇五号、二〇〇一年、二二頁～

一一二頁）

藤井教公・池邊宏昭「世親『法華論』訳注（二）」（『北海道大学文学研究科紀要』第一〇八号、二〇〇二年、一頁～九五頁）

藤井教公・池邊宏昭「世親『法華論』訳注（三）」（『北海道大学文学研究科紀要』第一一一号、二〇〇三年、一頁～七〇頁）

前島信也「七寺一切経における日本撰述經典について」（『日本古写経研究所研究紀要』第八号、二〇二三年、四九頁～六〇頁）

前島信也・新田優「七寺一切経録外經典『仏説老女経』翻刻・訓読・訳注」（『日本古写経研究所研究紀要』第八号、二〇二

三年、六二頁～七〇頁）

牧田諦亮監修・落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書』全六卷、大東出版社、一九九四年～二〇〇〇年

三井晶史編『昭和新纂国訳大蔵経』論律部第九卷、初版一九三一年（覆刻版一九七七年、オンデマンド版二〇〇九年）

箕浦尚美「玄應撰『一切經音義』書誌」金剛寺・七寺・東京大學史料編纂所・西方寺藏 玄應撰『一切經音義』について」

（『玄應撰一切經音義』二十五卷）日本古寫經善本叢刊第一輯、二〇〇六年、一五頁～三六頁）

宮崎展昌「竺法護訳『普超三昧経』の日本古写経三種と版本大蔵経諸本の関係について」（『日本古写経研究所研究紀要』第四号、二〇一九年、三七頁～六七頁）

望月海慧・金炳坤編『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、身延山大学国際日蓮学研究所、二〇二〇年
望月海慧「世親の『法華論』について」（『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、二〇二〇年、一頁～九頁）

望月信亨編著『望月仏教大辞典』世界聖典刊行協会、一九三三年～一九三六年

Terry Rae Abbott, "The Commentary on the Lotus Sutra," *Tiantai Lotus Texts*, BDK Tripiṭaka Translation Series, 2013, Berkeley: Bukkyō Dendō Kyōkai America, pp. 83-149.

稲園山七寺公式ホームページ <https://nanatsudera-osu.com/>（参照 二〇二四年九月二十八日）

国際仏教学大学院大学・日本古写経研究所「日本古写経データベース」<https://koshakyo-database.icabs.ac.jp/>（参照 二〇二四年九月二十九日）

常不輕院日真『科註妙法蓮華経論』龍谷大学図書館貴重資料画像データベース <https://dalibary.ryukoku.ac.jp/page/220309>（参照 二〇二四年十月一日）

拙稿「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』について」（『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号、二〇二二年、五七六頁～五七九頁）

拙稿「興聖寺本『法華論』（『こふへう』第十一号、二〇二二年A、六頁）

七寺一切経本『妙法蓮華経優婆提舍』解題・翻刻（浅野）

七寺一切経本『妙法蓮華経優婆提舍』 解題・翻刻（浅野）

八

拙稿「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』 解題・翻刻」（『仙石山仏教学論集』第十三号、二〇二二年B、一頁～七六頁）
拙稿「真福寺蔵『法華論』の紹介と史料的价值」（『いとくら』第十二号、《特集 真福寺大須文庫蔵『法華論』（鎌倉写本）》、
二〇二三年、三頁～四頁）

〈キーワード〉七寺一切経、『法華論』、菩提留支

Summary

Bibliographical Introduction and Transcription of “*Miaofa lianhua jing youpotishe* 妙法蓮華 經優婆提舍” in the Nanatsu-dera 七寺 Manuscripts

ASANO Manabu

This paper forms part of the author’s ongoing philological study of the *Miaofa Lianhua Jing Youpotishe*, hereafter referred to as the *Fahua Lun* 法華論, through the examination of ancient Japanese manuscript sutras. The study centers on newly discovered manuscripts of the *Fahua Lun* housed in the Nanatsudera Issaikyo Collection 七寺一切經, presenting both an annotated introduction and a complete transcription.

In December 2021, the author participated in a field survey of the Nanatsudera Issaikyo Collection, conducted in Ōsu 大須, Naka Ward, Nagoya City 名古屋市中区, by the Research Institute for Old Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures 日本古写經研究所. During this survey, two old Japanese manuscripts of the *Fahua Lun*, preserved at Tōenzan Nanatsudera 稻園山七寺, were examined:

1. **Single-Volume Manuscript:** This manuscript, a translation of the *Miaofa Lianhua Jing Youpotishe* by Bodhiruci 菩提留支, is well-preserved.
2. **Two-Volume Manuscript:** Also a Bodhiruci translation, this manuscript has minor damage to the opening section, but the majority of the text remains intact and legible.

In the introductory section, the fundamental details about these two

manuscripts are presented. It confirms that the single-volume manuscript belongs to the lineage of the “older form of Bodhiruci’s translation.” In contrast, the two-volume manuscript aligns with textual traditions shared by the Shōgozō edition 聖語藏本, the Kongōji Issaikyo edition 金剛寺一切經本, and the Fangshan Yunjusi Stone Canon edition 房山雲居寺石經本.

A textual comparison of various *Fahua Lun* manuscripts reveals that the text of the single-volume Nanatsudera manuscript closely resembles the version cited in Engu’s 円弘 *Miaofa Lianhua Jing Lun Shichū* 妙法蓮華經論子注. These texts retain archetypal characteristics that are absent in the Eizan edition 叡山版. Furthermore, the single-volume Nanatsudera manuscript corresponds to the Fahua Lun text quoted by Huizhao 慧沼, the second patriarch of the Chinese Faxiang school 法相宗. This finding establishes that texts like the single-volume Nanatsudera manuscript, which are not preserved among the Dunhuang manuscripts 敦煌写本, circulated as early as the early Tang dynasty.

In the transcription section, the single-volume *Miaofa Lianhua Jing Youpotishe* from the Nanatsudera collection is presented as the base text. The Eizan edition was used for collation, with all textual variants carefully noted.

Keywords: Nanatsudera Issai-kyō; *Hokkeron*; Bodhiruci

*Ph.D.,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*